

拜啓煤烟世間にて概して評判よき由結構に候。先日四方太は激賞の手紙をよこし候。

然る所一から六迄はうまい。(其中要吉が寺へ行つて小供に對する所は少し變也)七になつて神部なるものが出て来て會話をする所如何にもハイカラがつて上調子なり。罵倒して云へば齒が浮きさうなり。どうか御氣を御付け下さい。病院の會話も然りあれでは病氣見舞に行つたよりもあゝ云ふ會話をやりに行つたやうなり否あゝいふ會話が出来る事を讀者に示す爲に書いたやうなり。頗るよろしからず。君もし警句を生かさんが爲に小説をかゝば顔の美を保存せんとて手術は御免蒙り夫が爲に命をとられる虚榮心強き婦人と同じ。警句が生きると同時に小説減びる事あるべし。切に注意ありたし。夫から田舎から東京へ歸りて急に御種の手を握るのは不都合也。あれぢや、あとの明子との關係が引き立つまい。要吉は色魔の様でいかん。

要吉は細君に對して冷刻なる觀察其他要吉の名譽にならぬ事をしたたり云つたりする。五六行先へ行くと必ずそれを自覺して自己を咎めてゐる。是草平が未だ要吉を客觀し得ざる書き方なり。自己の陋を描きながら自から陋に安んずる能はずして一解ごとに辯解しつゝ進まば厭味にあらずして何ぞや。但し是は書き方にあらず寧ろ書き方の呼吸なるべし。御注意ありたし

四方太激賞の後二三日前出會す。彼曰く今迄大に擔いだが今更困ると。余曰く忠告すれば元氣沮喪しさうだし。忠告せざればますますあんな風に會話をかくだらう困つたと。小宮もあの會話に不賛成なり。

たゞしあの會話も時と場合にて活きる事あらん。君の用ひたる時と場合にては全くうその會話也。右の條々御注意迄に申入候猶御努力可然候 草々

二月七日

金之助

草平様

今日の所持ち直しの氣味なり

七八二

明治四十二年二月七日 午後四時—五時 牛込區早稲田南町七番地より金澤市櫻島九番町十九番地大谷正信氏へ

拜啓其後は御無沙汰奉萬謝候當時不相變電車の如き生活毎日頭のみ忙がはしく御座候二三日来氣候も少ゆるみ少しは春めき候「へ」ども氷はまだ張り候。北の方は噤かすと存候。随分御大切に御攝生可然と存候カキ「愚」わざ「く」御贈御厚意深く奉謝候。あれは先年も誰か「ら」(四方太と氣がつき候。四方太のは鳥取の蟹で大兄のは金澤のかになるが味も鳥取と金澤との相違可有之か。風味の上批判可致候

御地仕事の模様拜承外國人への御教授も面白きかと存候先日佐治秀壽の言にも其邊の消息有之。俳句は只今一句も出來ず。大兄は不相變御勉強。永日小品は面白いのと面白くないのと有之よしどうぞ参考の爲め面白いのと面白くないのとを指摘被下度候右不取敢御禮申上候 草々

二月五日

金之助

繞石兄 座右

七八三

五九三

明治四十二年二月八日 夜 牛込區早稲田南町七番地より牛込區早稲田南町十番地飯田政良へ

五九四

原稿は御希望通只今郵便にて春陽堂へ送り申候先方より其内諾否の返事をくれるやうにたのみ置候故其事がきまらぬうちは「町の湯」を外へ出す事は御控被成べく候。尤論の事なれど御注意迄に申上候。文章世界差上候
先は右迄 草々

二月八日

飯田政良様

夏目金之助

七八四

明治四十二年二月九日 午後十二時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より赤坂區青山南町六丁目百〇六番地坂元三郎へ

拜啓御尋ねの書物小生の記憶になしよく調べ又は聞き合せて御返事すべし。多分ないだらうと思ふ死際といつても色々比較して何か一定の概括が出る様なら面白いが到底出来まいそれに天才とはどんなものかきめてかゝらなければならぬ。それから死ぬ時の有様の區別
(一)病氣 キーツ肺病。ニイチエ、モーバサン等氣狂、スキフオ同上輕病等
是等は何かまとめられる。
(二)天才使用の社會的結果。ナボレオン。ユーゴの島流し(是は死ニアラズ)。あらゆるマーチャー
(三)獨身 シオベンハワー(是も死際にあらず)
(四)楠正成、西郷隆盛の類

(五)窮死チャタートン
(六)放狂エルレーン等

其他色々になるべし。よく御考の上類別可然候。
稗烟のどこを見てそんな氣を起したのか。天才は鹽原杯へは行かない方が多い様なり。尤も鹽原行の天才もあるべしと云へど是は寧ろ例外ならん
御承知のロンプロゾーの「天才と狂氣」といふ本に特色が澤山かいてある但し死際はさう書いてない
以上

二月十日

夏目金之助

坂元様

七八五

明治四十二年二月十七日 牛込區早稲田南町七番地より日本橋區通四丁目春陽堂内本多直次郎氏へ

拜啓友人生田長江氏今般ニイチエの代表的作物ザラッストラ全部の翻譯を思ひ立ち候に就ては右出版の件につき貴堂を煩はし度旨依頼有之候につき御紹介申上候。どうぞ御面會の上御相談被下度候。此間の御話では翻譯ものはちと御迷惑の様なりしもザラッストラは少部分竹風君によつて翻譯せられたるのみにてまだ何人も手を着けて居らぬ様子故如何かと存じ一寸申上候 以上

二月十七日

夏目金之助

五九五

本多直次郎様

五九六

七八六

明治四十二年二月二十二日 午後二時—三時 牛込區早稲田南町七番地より京橋區元數寄屋町三番地太平洋通信サンデー發行所内安成二郎氏へ
昨日はサンデーへの談話の件につきわざわざ御來訪の處多忙中不盡其意遺憾に存じ候間あらためて手紙にて小生の考を申上候

近來雜誌に諸家の談話を掲載する事流行なれどあけて見るとつまらぬもの多く購買者は色々な名が行列して居るのでだまされて買ふと一般に候。甚だよろしからぬ弊風と存候。それからもう一つは青年子弟があんな馬鹿氣た談話を見て所謂文學者の談話意見とはこんなものかと思ひ込みたまはゞ骨の折れた研究に價する論文杯が出ては始めから面倒がつて眼さへ觸れぬ事に候。是は雜誌にも責任あれどはなす方にも責任有之小生は深く此無責任の談話をはづるの結果從來の行掛上不得已特別の關係ある雜誌にあらねばはなしを御免蒙る方針を立て候。それからもう一つは自分がいそがしくて一々雜誌記者に談話をして居る事が出来ぬのも原因の一つに候。時々談話に誤謬があつて人に迷惑を及ぼすのも原因に候。

右の諸事情からして一應御斷り致候譯なれど木曜に御出を願つて講釋をするがものはなく候故手紙にて右の主意を申上候。あしからず 馬場君へもよろしく 草々

二十一日

安成二郎様

夏目金之助

七八七

明治四十二年二月二十三日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より京橋區元數寄屋町三番地太平洋通信サンデー發行所内安成二郎氏へ
拜啓再應の御手紙拜見致候小生の特別の緣故ある雜誌と申すはホト、ギス其他二三從來の關係上已を得ざるものを指す意味に候。其他の雜誌はさきに申上たる理由にて今度より段々御斷わりを致さうと決心せる矢先故甚だ御氣の毒なれど談話は掲載の義は御容赦にあづかり度と存候。小生身心閑適にて充分自己の意見をまとめ一々訪問記者の御満足に參る様出來候へば始めよりかかる氣の毒な事は誰にも口外せずして済む次第に御座候其邊は御承知被下度候 以上

二月二十三日

夏目金之助

安成二郎様

七八八

明治四十二年二月二十四日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ (はがき)
俳諧趣味とか俳句に對する君の考とかは黙つてゐた方がいゝ。俳句を研究する人に任せべき事だ。夫より有益な大問題はいくらでもごろ／＼してゐる。尤も特別の考あれば無異義。俳人何ぞ君の俳論ヲキクヲ要セン

七八九

五九七

明治四十二年三月一日 午後四時—五時 牛込區早稻田南町七番地より日本橋區通四丁目春陽堂へ (はがき)

啓三四郎原稿校正は小宮氏に依頼の處都合により牛込區早稻田南町五十一西村誠三郎氏に依頼變へ致し候につき校正は同氏方へ御廻送願上候 以上

三月一日

七九〇

明治四十二年三月三日 午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より鹿兒島市山下町三百六十五番地佐藤平藏方皆川正禮へ

拜啓御地は暖國だから梅杯もとうから咲いたらう。當地は今が盛なれど町内には一本もない様也。見に行く所もないうちに散つて仕舞ひさうだ。今日は御節句で長閑で好い心持だ。然し風が強くて不可ん。小松原が今朝立つたので新橋迄送りに行つた。歸りに丸善へ寄つて佛蘭西の小説(英譯)を三四冊買つて歸つた。丸善の通は改正で見違へる様になりつゝある。

ザボンの罐詰着難有う。細かに切つて食つてゐる。あれは甘ひものだが澤山食ふと胃の毒だね。近頃葡萄酒を食毎に呑んでゐる。

此一週間程少々心地が閑適で生命が延びつゝある。それに春風が何よりの藥だ。鶯が時々鳴く、あれは好いものだ。西洋人は知らないものだ。文學評論が一週位すると出来る。上げるから學生に紹介して呉れ玉へ。

野間は不相變丈夫の事だらう。久しく無沙汰をしてゐる。よろしく。此間坂牧善辰が來て教師を探してゐた。今日副島に逢つたら日本の美術を研究する男の顧問になつて鎌倉に居るさうだ。 草々

三月三日

正 禮 様

七九一

明治四十二年三月十三日 午後五時—六時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小宮豊隆へ (はがき)

アンドレーフをならひてより急に獨乙語趣味が出た様なれば此機に乗じて次の仕事に取りかゝる迄大いに勉強仕度、どうぞ日數を御ふやし下さい。尤も來月のホト、ギスに何か書くなら御掛念に及ばず

七九二

明治四十二年三月二十日 午後六時—七時 牛込區早稻田南町七番地より府下東町上駒込三百三十四番地野上八重へ (はがき)

鳩の話早速拜見。面白く候すぐ虚子の手許へ廻し候來月は附録を出すとか出さぬとか申居候故都合によりては如何と思ひ候へども出来るならば掲載する様頼ひ置候

七九三

明治四十二年三月二十九日 午前十時—十一時 牛込區早稻田南町七番地より鹿兒島市下龍尾町百九十一番地野間眞綱へ

其後御無沙汰先達ては御親戚のものより御惠投の香爐御地産錫の盃一個と黒柿の杖正に拜受早速御禮狀を出す筈の處當時「文學評論」出版の砌にてそれを一冊添へて手紙を書かうと思ひ居りたるに「文學評論」春陽堂から小生の方へ獻本せざる先に悉皆本屋の方へ廻したる爲め再版來るを待ちとうく御無沙汰をせりいづれ二三日中には君と皆川君へ宛贈り候間御ひまもあらば御一覽學生へ御紹介を乞ふ。先日寺田寅彦

外國へ留學星岡茶寮にて送別會相開き傳四も参り候。過日皆川よりザボンの砂糖漬到來早速禮狀を出し候處もとの下宿へあてたる爲め届かぬと覺え聞合せ参候へども其内宛名の下宿より届けて呉れる事と存じ打遣り置きたり御面會の節右御傳可被下候。春暖落梅鶯啼の好時節御地は櫻さへ咲たる事と察せらる。一年の佳節すべからく遊樂すべく遙かに御勧め申候 以上

三月二十九日

眞綱様

金之助

七九四

明治四十二年四月二日 午前六時—七時 牛込區早稲田南町七番地より千葉縣千葉町仁山堂病院鈴木三重吉へ

昨夜豊隆歸京君が酔拂ひになぐられて眼に創を拵らへたといふ警報に接し大に御氣の毒に思ひ居候。眼球の故障の方は心配なき由につき先々安心なれどわるくすると藪脱みの悲運に廻り合ふやも知れぬ由隨分精出して御療治可然かと存候。好男子惜むらくは遠近を知らず杯とあつては甚だ心細く候。豊隆申候には「三重吉が眞面目くさつて、どうも私の不徳の致す所だ……」といったとて大いに笑ひ候。私の不徳の致す所は近來の大出来と存候。

此間中より食傷の結果胃痛にて困難罷在候。三四日蟄居の體何か持つて御見舞に上り度れど、どうも其内には退院になりさうであるから一先づ手紙を以て御左右を伺ひ奉る。草平大怪骸を揚げてやに下り居候。大兄も何か一つ我黨の爲に御書き被成度候。豊隆アンドレーフ論をホト、ギスに送り候。小生は豊隆にアンドレーフを教はり居候 以上

三月三十一日

〔封筒の裏には四月一日とあり〕

金之助

三重吉様

七九五

明治四十二年四月三日 午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より金澤市櫻島九番町十九番地大谷正信氏へ

春暖の候愈御清適奉賀候。其後は存外御無音に打過申譯無之候。過日文學評論出來の節早速一部進呈の積の所初版は賣切とかにて漸く手元へ一部持参致したる迄にて其他は今日に至る迄いまだ納本仕らず従つて諸君へも未だ寄贈の運に至らざりし處御地にて態々御購求御一覽を賜はり候のみならずとくに御推奨の辭を辱ふし加之御叮嚀に誤植の表迄も御示しにあづかり感佩此事に候。萬事行届かぬ事多く自分にも不満足の箇所多く有之候へども若し御氣付の所も有之候へば御示教にあづかり度と存候。永日小品はなぜ東京へ載せなくなり候や小生にも分らず候。四月下旬より又大阪の方へ少し續くものをたのまれ執筆〔の〕都合につき御讀被下候へば幸甚に候。東京の方は煤烟のあとを與謝野鐵幹がかきそのあとを小生がかくべき役割の様に承はり候右御禮旁御返事迄 草々不

四月三日

金之助

繞石兄

座下

折角の御訂正二版には間に合かね候。もし三版も出る好機も有之ば御厚志を利用致し度と存候

明治四十二年四月三日 午後六時—七時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地大塚保治氏へ

拜啓かねて大學在職中にやつた講義ののこりものを又出版したから御覽に入れる。もう是で大學に縁のあるものはなくなつた。大學は君の周旋で這入つた處だから夫が縁故で出來た著書は皆君が間接に書かした様なものだから記念の爲め一部机右に御備へ置を願ひたい。中は讀んでも讀まなくてもいい、が可相成は讀んでくれる方がいい。さうして批評をしてくれ、ば猶結構である 艸々

四月三日

大塚様

金之助

先達て奥さんが御出の節文學評論が一部欲しいと仰しやつたさうだがもし別に今一部御入用なら、まだ一三部あるから夫を献上してもいい。然し君にあげれば大抵よからうと思つて一部にして置いた。よろしく

明治四十二年四月十二日 午後九時—十時 牛込區早稻田南町七番地より千葉縣千葉町仁山堂病院鈴木三重吉へ

拜啓御病氣漸次御回復結構に候入院其他の費用嵩み御困難の由承知御無心の五十圓ちと辟易なれど外の事にも無之兩三日〔中〕に御送附可申につき御安心御療養可然候。大阪へ今月末から小説をかく約束あり

何にも履行する了見起らず。花が咲く所爲と存候

小宮の評論中々タチよろしく候當地にても眞面目な人には評判よき方結構に候。森田のも世間では大分もてゝ居る由。

先は右迄 草々

十一日

金之助

三重吉様

昨今風にて上野の花大分散り候よしに承はり候澤山錢をもつて湯治に参り度と存候

今日散歩の歸りに鯉節屋を見たら亭主と覺しきもの妙な顔をして小生を眺め居候。果して然らば甚だ氣の毒の感を起し候。其顔に何だか憐れ有之候。定めて女房に惚れてゐる事と存じ是からは御神さんを餘り見ぬ事に取極め申候
右は序迄餘は拜盾に讓る

明治四十二年四月十九日 午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内坂元三郎へ

御手紙の趣承知せり六月十日より掲載となつては大分切迫の感あり。出來る丈大塚さんを延ばす御運動を乞ふ

小生かくものは長短不定なり。(長い方の御注文なれど)短かければ年内に分量的に勘定の立つ様に何遍もかく積也

右迄 草々

四月十九日

六〇四

坂元三郎様

夏目金之助

七九九

明治四十二年四月二十二日 午後六時—七時 牛込區早稲田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内坂元三郎へ

拜啓森田草平の煤烟は社へ掲載の約束なりたる當時原稿料は大塚氏のそらだき同様にてよろしきやとの
濫川氏の間に對し承知の旨を答へ置候。

そらだき原稿料は一回四圓五十錢と記憶致し候が間違に御座候や
本日森田参り社へ稿料をもらひに行つたら煤烟は一回參圓五十錢なる故最早渡すべき金なしと山本君より言はれたる由

それで小生の考と原稿料の點に於て少々矛盾相生じ候。もしそらだきが一回參圓五十錢ならば小生の覺え違草平に對して小生の責任に候が小生は四圓五十錢と記憶致居候につき念の爲め御問合せ申候。御多忙中恐縮なれど一寸御しらべの上御一報願度候 以上

四月二十二日

夏目金之助

坂本三郎様

八〇〇

明治四十二年四月二十四日 午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區菊坂町三十一番地雄集館林原(當時岡田)耕三へ [はがき]
拜復急用なればいつでもよろし急がずば木曜の都合の好い時に御出可被成候文學評論を一部上げてても好
いが忙がしくて讀めないだらう

八〇一

明治四十二年四月二十四日 午後五時—六時 牛込區早稲田南町七番地より千葉縣千葉町仁山堂病院鈴木三重吉へ

拜啓病氣漸々御快復奉賀候當日麗日好風囊中無一物にして何となく表をあるきたき心なり
草平一回分參圓五十錢のを四圓五十錢と間違へ朝日へ原稿料をとりに行つて拒絶を食ひ蒼く成居候是は
實は小生の記憶違より出づ。滑稽よりも氣の氣なり。て百圓程の損

小宮のアンドレーフ論を御褒めのよし是から褒める時は可成公共の機關を利用して天下に廣告ありたし。
國文の文學欄至極よろしからん。由來吾黨の士は内々で褒めてる許だから戰國亂世の今日には丸で無
能力と一般に候。彼徒のなす所を見ると敵の機關を借りて迄傍若無人の法螺を叩き居候。あれ程押が強く
なければ日糖事件の今日には文士として通用致さぬにて候

小説は大阪へ出すにて候。まだ一回も書かず候。何だか如是閑と申す男が?といふ標題で今しきりに書
いて居り候。其あとへでも載せる氣にや一向催促も参らず候。然し小生ももう書き始める積りに候唯何を
書いてよきか分らぬ丈に候

六〇五

細君子宮内膜炎、エイ子肺炎、アイ子純一風邪、家内不安全 一時は當惑、小生も精神過勞にて陰莖内膜炎にでもなりさうな氣が致したり。現今諸人平癒に向ひ候。漸く安堵
遅櫻、山吹 若芽甚だ快適 以上

四月二十四日

三重 吉様

金之助

八〇二

明治四十二年五月三日 午後二時—三時 牛込區早稻田南町七番地より鹿見島市第七高等學校野間真綱へ

追々暖かにな候御機嫌の事と存候先日手紙にて御問合せの件松根東洋城に相談致候處御引受致してもよろしくとの事故玉稿同人方へ御廻付可然候住所は赤坂表町一丁目貳番地山口方に候先は用事迄 草々
五月二十五日

金之助

眞 綱 様

八〇三

明治四十二年五月三日 牛込區早稻田南町七番地より日本橋區通四丁目春陽堂内本多直次郎氏へ

拜啓先日御話申候文學評論誤植以序差出置候間改版の節何とか御工夫被下度候右用事迄 草々頓首
五月三日

夏目金之助

本多 嘯 月 様

八〇四

明治四十二年五月七日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より鹿見島市長田町城ヶ谷百二十一番地林久男氏へ

其後達者にて御暮し奉賀候時々は薩摩へ行つて櫻島が見度なり候ものゝ其日々に追はれると是も夢に候砂糖漬わざく御送り被下難有拜受此間皆川からも貰ひ候あのザボンの砂糖漬の偉大なるには驚き候西郷隆盛の砂糖漬の様なものに候「三四郎」不日出來につき出來たら御返禮に差上度と存候
右御禮迄 草々

夏目金之助

五月七日

林 久 男 様

小宮は徴兵の件にて郷里へ歸り候御婆さんは食物を食はず腹を下して可成からだを疲らして歸つて來いと云つて來た由さうして其手紙を書留にして小宮へ送つた由愛嬌に御座候

八〇五

明治四十二年五月九日 午前九時—十時 牛込區早稻田南町七番地より京橋區日吉町國民新聞社内野上豊一郎へ
拜復安倍能勢宇宙の評をかく由結構に候。あれはどこで「も」評をせず。不都合に候。帝文に内田夕閣

といふ人有之あの人の方が天弦より理窟の云へる様に御座候。序に御依頼如何に候や。美學に乙骨三郎といふ人有之時々書いてもらつたら面白い事があるかも知れないと存候。其他澤山あるべく候。親類にごたくある由御面倒御察し申候。小生愈小説にかゝらねばならぬと存じバザンの小説を二巻よみ候いづれも駄作に候。右迄 草々

五月八日夜

豊一郎様

金之助

八〇六

明治四十二年五月二十三日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より金澤市第四高等學校大谷正信氏へ

拜啓「三四郎」出来につき一部進呈仕候御落掌被下度候 草々

五月二十三日

〔はがき〕

八〇七

明治四十二年五月二十五日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より赤坂區仲町十九番地橋口清氏へ

拜啓先達ては多勢まかり出御邪魔致候三四郎御盡力にて漸く出版難有存候

表紙の色模様の色及び兩者の配合の具合よろしく候

然し文字は背も表紙もともに不出來かと存候

小生金石文字の嗜好なく全く文盲なれど畫家にはある程度度此種の研究必要かと存候、尤も大作を以て

任ずる大兄に對して挿畫家もしくは圖案家に對する注文杯持出しては御叱りあるべけれど、此は研究のみならず娯樂としても充分面白き業かとも存候。

不取敢御禮旁無遠慮なる悪口申上候失禮御ゆるし可被下候 以上

五月二十五日

夏目金之助

橋口清様

二伸 御令兄へよろしく御傳聲先達拜見の畫皆々面白く存じ候

八〇八

明治四十二年五月二十八日 午後十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より金澤市櫻島九番町十九番地大谷正信氏へ

拜啓三四郎の切抜態々御送被下難有御禮申上候あれは進呈本の代りに小生方に記念として所藏可致候又

又小説に取りかゝらねばならぬ事と相成候。來月末より東京大阪雙方へ掲載の筈に御座候。先便中の下旬

と申候は都合により延期致候ものに有之候

先不取敢御禮迄 草々頓首

五月二十八日

金之助

繞石老兄

明治四十二年六月二日 午後五時—六時 牛込區早稲田南町七番地より横濱市根岸町三千六百二十二番地久内清孝氏へ 「はがき」
拜啓御惠送のピツクルス二瓶着難有拜受致候右不取敢御禮迄申上候。文學評論御通讀被下拜謝此事に候

明治四十二年六月四日 牛込區早稲田南町七番地より牛込區早稲田南町十番地飯田政良へ

舌代

菓子少々御目につけ候につき御つまみ被下度候 以上

四日

飯田政良様

夏目金之助

明治四十二年六月十二日 午前十時—十一時 牛込區早稲田南町七番地より京橋區龍山町四番地東京朝日新聞社内山本松之助氏へ
拜啓大塚女子のあとの小説掲載の日どり御報知奉謝候

小生の小説の名は「それから」と申候今月二十前後に二三十回纏めて御送附可致候

「それから」は大阪と交渉まとまり東朝と同日より向ふにても掲載の筈につき右御含みの上可然御取計願上候

豫告の文字必用なれば五六行相認め可申候さらずばたゞ「それから」文を御豫告願候
右用事迄 草々頓首
六月十二日

夏目金之助

東朝社會部

山本様

明治四十二年六月十二日 牛込區早稲田南町七番地より日本橋區通四丁目春陽堂内本多直次郎氏へ
拜啓京都大學圖書館長島文次郎氏より別紙の如く申來候については甚だ御面倒ながら文學評論一部御堂より同氏宛にて京都大學へ御寄贈被下度候右用事迄 草々頓首
六月十二日

夏目金之助

本多直次郎様

明治四十二年六月十二日 午後十二時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より京橋區龍山町四番地東京朝日新聞社内山本松之助氏へ
拜復
「それから」の豫告別紙認め候、可然御取計願上候。大阪へは小説の名前通知致し置かず候故豫告文と

ともに御廻し願上候

原稿は十八九日迄に出来た丈可差出候 草々

十一月二日夜

社會部主任

山 本 様

夏目金之助

八一四

明治四十二年六月二十二日 午前十時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内山本松之助氏へ
拜啓

別紙萬朝の召波たまね君より参りました。御一覽の上差支がなければ都合の好い時に御載せ下さい。
御手敷を煩はして濟みません
此會には私もたのまれて關係があるから頼んで来たのであります 草々

六月二十二日

山 本 様

夏目金之助

八一五

明治四十二年七月一日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より横濱市元溜町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

其後は意外の御無沙汰益御健勝の事と存候横濱は開港五十年祭で大變な賑はひの由大分面白からうと只
でさへ出掛けて見たき心持に候

昨日は御招きの御手紙を頂戴御親切の段鳴謝致候家の^{養生}ものは行つて御覽なさいと勧め候小生も行きたく
候然るに例の如く只今小説起草の低氣壓を感じ新聞より肉薄を受け居る最中其上客杯参ると一日つぶされ
る。昨日杯も音樂の先生が朝から晩迄居つた爲め今日はせめて一回でも埋合せをせねばならぬと氣を焦ち
候。

あなたの招いて下さる時は何か故障があつて何時でも快よく参上した覺がない私も甚だ遺憾に思つて
ます。が今度も右の譯故斷念します、もう一ヶ月もすると小説を書き上げてしばらくは樂になります其時
もし機會でもあつたら御目にかゝりたいと思つてゐます
あなたに歌舞伎へさそはれと事^原があるが此間とう／＼行つて芝居を見ました。不折も行ききました。不折
も私も素人だから面白い。ツンボが蓄音機を買ふ様なものですな。 草々

七月一日

金 之 助

渡邊和太郎様

八一六

明治四十二年七月五日 午前(以下不明) 牛込區早稻田南町七番地より京橋區日吉町國民新聞社内野上豊一郎へ
拜啓國民文學原稿料拜受
水上齋^原の原稿をたのまれて虚子に紹介し置きたる處別紙端書到着につき一寸高濱君に御聞合せ願度候

六二四
あれは多分駄目と思ふ虚子多忙なら一寸見てやつてくれ玉へいけなければ水上へ返してやつて呉れ玉へ以上

七月五日

豊一郎様

金之助

八一七

明治四十二年七月六日 午後二時—三時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ
拜復

「三四郎」を包んで畔柳都太郎様といつもの如く書いて置いたら森卷吉が来て奪つて行つた事は慥也本人をつらまへて御糺明被下たし。

實は拙著をやる所はいつでもやり、やらぬ所はいつでも遣らぬ故今度は少し方針を易へて今迄の人を抜いたる趣也。其故如何となれば。

あまり小生の本ばかり貰つても持て餘す連中あるべし。引越の時厄介だ杯といふ人が出来てもつまらないから少々此方で遠慮しやうと云ふデリカシーなり。然るに大兄は御迷惑でなき由そこが明らかになれば是からの著書を必ず一部づゝ進呈仕るべし。其代り御保存の責任は無論有之候。今一ヶ所から君同様の苦情を擔ぎ込まれたり。

若杉三郎なるものは、あなたの作つたものは屹度一冊宛下さいと約束を逼り候。此方がやる方では先方の意志明瞭にて都合よろしく候。

本屋に申付御送可取計候。もし又中に何か書く必要あらば序を以て認むべく候。草々以上

七月六日

金之助

芥舟先生

八一八

明治四十二年七月六日 牛込區早稲田南町七番地より日本橋區通四丁目春陽堂内本多直次郎氏へ

拜啓甚だ申かね候へども「三四郎」を赤坂區表町一丁目二番地松根豊次郎方と、夫から本郷西片町十畔柳都太郎方と、二ヶ所へ一部づゝ御送り被下度願上候。毎度御手数恐縮致候 以上

七月六日

夏目金之助

本多嘯月様

八一九

明治四十二年七月八日 午前六時—七時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地大塚保治氏へ

美學の會へは僕の方が傍聴に出たいと思つてゐる。御話し杯はとも出来さうもない。

拜復

文學評論を通讀して呉れて寔とに難有い。其上わざ／＼批評を書いて貰つて濟まない。大變に過重な褒辭を得て少々辟易するが矢張り嬉しい。それから悪い所をもつと色々指摘してもらひたかつた。もつと無

遠慮に僕の参考になる様に云つてくれると猶よかつた。がそれは忙がしい君に望むのは僕の方の無理かも知れない。

六一六

國民の野上が君の所に文學評論の印象を聞きに行つたら君は斷はつた。其手紙を僕に見せた。僕も仕方なしにその儘にして置いた。

實はあれを國民文學へ出したい。君も別段異存もあるまいと思ふから、失敬だけれど專斷で送る。

何故送るといふと矢張り自分の書物を廣告したいといふ事に歸着するが、もう一つは君の意見を公衆の参考にしたい。(そこでもつと僕の缺點があけてあれば結構だと云つたのである。)

君の所に御産があつた様に聞く。奥さんも赤坊も御壯健ならん事を祈る。菅の細君病氣長びき困却の様子。僕其後未だ逢はず。

また小説をかき始めて多忙御目にかゝつたら萬々不取敢御禮旁御願迄 草々

七月七日

大塚様

金之助

書いて仕舞つて考へると私書を無斷で出すのもわるい様だ。もし不可なら、端書を一本くれ玉へ。國民の方へ通知ヲ出ス

八二〇

明治四十二年七月十五日 午前十二時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内山本松之助氏へ

拜啓別封の如きもの小生の手許へ参り候。大兄とは直接關係なけれど一寸面白き故御目にかけて候。封入の爲替は販賣部へ御廻し可然御取計の程本人の爲に願上候 草々頓首

七月十五日

金之助

山本様

八二二

明治四十二年七月十五日 牛込區早稻田南町七番地より岡山市古京町内田榮造へ

拜啓御手紙と玉稿到着致候直ちに拜見の上何分の御批評可申上筈の處只今拙稿起草中にて多忙故夫が濟む迄しばらく御待被下度候

尤もホト、ギス掲載方御希望につき原稿は虚子の方へ一應廻付致し可申候虚子が適當と思へば此次位に載せるならんと存候へども其邊は編輯の權なき小生には何とも申しかね候

右御返事迄 草々

七月十五日

夏目金之助

内田榮造様

八三三

六一七

明治四十二年七月十八日 牛込區早稲田南町七番地より牛込區早稲田南町十番地飯田政良へ
拜啓

六一八

○○○○といふ人はいゝ人だけれども金の事は丸で當にならないさうである此間中村武羅夫に逢つたらあの人に頼んぢや駄目だといつて居た。其時徳田秋聲なら好いと云つた。

もしつてがあるなら徳田君にでも逢つて見給へ
ホト、ギスへも出来るなら周旋する事は出来る。が夫は物次第である。
金を五圓上げるから又湯にでも這入つて氷水でも呑み給へ 草々

七月十八日

飯田 青涼様

夏目金之助

八三三

明治四十二年七月二十日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より京橋區日吉町國民新聞社内野上豊一郎へ (はがき)
秋骨先生僕の文學評論の評を二六へかいてくれた由二六はとつてゐず。御面倒ながら君の所にあるのを切抜いてくれ玉はぬか 以上。
今日は稍涼し大慶

八三四

明治四十二年七月二十六日 午後四時—五時 牛込區早稲田南町七番地より安房國北條字八幡江戸屋神柳都太郎氏へ

御手紙拜見

避暑結構小生書齋にて執筆中々暑い事に候。昨日齋藤阿具青木昌吉兩氏参り夕刻迄談話二人とも○○○
○○○○○○○○○○○糞の如く申しゐたり。是はたしか大兄も御嫌の一人故とくに御吹聴に及び候。

「それから」の主人公は小生だとの御斷定拜承所があの代助なるものが姦通を致しさうにて弱り候。小生にもそんな趣味があれば別段抗議を申入るゝ勇氣も無之候

大塚の文學評論評は局部々々に小生の妙に思ふ所有之。然し大塚の様な無精ものが書いてくれた事故大いに感謝の意を表し居候。秋骨は二六に書いてくれ候。

大塚は重箱の如くキチンとしたる頭の男に候。形式家としては整然たるものに候。面白い説を吐く人としては一寸推服致しがたかるべきか。尤も夫程大塚のものを讀まぬ故何とも申しがたし。一日も早く此説を正誤致し度考に候。

森卷吉は沼津に参り候。小生小供の爲にピアノを買はせられ候。ピン／＼ボン／＼中々好音を發し申候
七月二十六日

金

芥舟 先生

大學の英文に井上十吉氏入る由高等學校の方は如何

八三五

明治四十二年八月三日 牛込區早稲田南町七番地より牛込區早稲田南町十番地飯田政良へ

六一九

御手紙拜見

折角だけれども今借^原して上げる金はない。家賃なんか構やしないから放つて置き給へ。僕の親類に不幸があつてその葬式其他の費用を少し辨じてやつた。今はうちには何にもない。僕の紙入にあれば上げるが夫もからだ。

君の原稿を本屋が延ばす如く君も家賃を延ばし玉へ。愚圖々々云つたら、取れた時上げるより外に致し方ありませんと取り合はずに置き給へ。

君が悪いのぢやないから構はんぢやないか 草々

八月一日

飯田青涼様

夏目金之助

紙入を見たら一圓あるからは是で酒でも呑んで家主を退治玉へ

八二六

明治四十二年八月十六日 午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より安房國北條字八幡江戸屋畔柳都太郎氏へ

拜啓當地暑氣少々ゆるみ稍凌ぎよく相成候。御地は如何。菅の細君長々病氣の處十五日死去氣の毒に存候。小供澤山にて大弱りの體。小生漸く小説脱稿是から讀書が出来る事と樂み居候雜誌のたまつたものを片付ける丈でも一仕事に候。森は教授になり先々結構。

此近年避暑といふものをした事なく旅行を思ひ立つても時間の惜いのと金の惜し「い」ので成就せず。

大倉といふ爺さんが朝日新聞記者にめしを食はして常盤津を聞かして是が私の道樂で御座いといふ様な事を實例で示したのは大倉の口振ぢやないが好うがすな。外の奴より餘程洒落てる。朝日の記者は恐らく常盤津も何も分らない奴で辟易したんだらうと思ふ。其分らない所を分つた様に書いたり振舞つたりしてゐるから、大倉の爺さんに舐められてゐるのみならず、讀者も少々氷魂先生を踏み倒したくなる。私はあの實業家廻りを面白く讀んでゐるあれは下手な小説を讀むより可うがすよ。國民には先達てから文士の遊び振りといふものが出てゐる。笹川臨風、田岡嶺雲、姉崎嘲風、樋口龍峽ことゝく生捕られ候。御覽にや面白く候。

エリスのセックスの心理といふ本を二冊買ひ候。こんな本は讀んでゐるうちは面白くて讀んで仕舞ふと誰かに遣つても惜しくない種類のもの多く候。

關東に大地震が有之候。寺田が立つ時近いうちに大きな地震があるかも知れませんが、果して豫言適中なり先づ〜我々は厄逃の氣味に候。

ゆる〜御養生御歸京の上何れ御目にかゝり可申候 以上

八月十六日

金之助

芥舟先生

八二七

明治四十二年八月十九日 午後三時—四時 牛込區早稲田南町七番地より攝津國御影町前川藩二氏へ

御手紙拜見致候御藏書小生の爲に御割愛被下候由難有仕合に存候頂戴可致候頂戴の上は御寄贈の御厚志

六二一

に對し永く丁重に保存可致候右不取敢御返事迄 草々頓首

八月十九日

幾川清二様

夏目金之助

一伸小生不日旅行の積につき留守中に御受取の際は自然御禮狀を忘るやも計りがたくにつき其邊は御容赦被下度候

八二八

明治四十二年八月二十四日 午前六時—七時 牛込區早稻田南町七番地より牛込區市ヶ谷田町三丁目十一番地中島六郎氏へ

拜復小生病氣につきわざ／＼御見舞狀を頂き難有存候。小生は御承知の通り年來の胃弱なれど今回の如く急性カタルを起したるは始めてにて一時は嘔吐烈敷自分ながら生きてるのが厭になり候處うまくしたるのにて今日位から少々人間の慾望出來此手紙も寐ながら書ける様に相成候まづ／＼御安心被下度候。大兄も少々腸胃の御加減よろしからぬ由随分御養生專一と存候然し大兄の如く強壯無比のものは少しは腸胃病に冒さるゝ方色氣ありてよろしかるべくと存候

諸諸先生御招飲の件最初は「それから」執筆中次には荆妻臥尊中第三には小生の病氣最後には滿洲旅行にて漸々願繰りに延引甚だ恐縮の至是はとくに此書面にて御詫を申上度と存候

滿洲旅行は友人の勸めて參る事に相成滞在日子も不定なれど歸京の上は天地神明に誓つて前約履行の覺悟に候へば天高馬肥の時期に乗じ諸君子腹を抱いて御來駕被下候様あらかじめ願置候

右御禮旁御詫迄 草々不一

八月二十三日

金之助

中島様

八二九

明治四十二年八月二十四日 牛込區早稻田南町七番地より岡山市古京町内田榮造へ

御手紙拜見老猫批評の件頓と失念致居候甚だ申譯なく存候小説脱稿後種々の用事重なり居候處へ急性胃カタルに罹り臥尊の爲め何やら蚊やら取紛れ申候あしからず御海恕願候

幕中早速「老猫」を拜見致候筆ツキ眞面目にて何の衞ふ處なくよろしく候。又自然の風物の敘し方も面白く思はれ候。たゞ一篇として通讀するに左程の興味を促がす事無之は事實に候。今少し御工夫可然か。

尤も着筆の態度、觀察其他はあれにて結構に御座候へば其點は御心配御無用に候。虚子の評によれば面白からぬ様に候へども小生の見る所は虚子よりも重く候。猶御奮勵御述作の程希望致候

花筵一枚御贈被下候由難有候小生病氣全快次第旅行にまかり出候につき留守中に到着候節は御返事も怠り可申につき其邊はあしからず

先は右御返事迄 草々頓首

八月二十四日

夏目金之助

内田榮造様

明治四十二年九月二日 午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より京橋區日吉町國民新聞文學部編輯へ〔はがき〕
是より出發す。風聞録に出立とある時は在京、見合せとあるときは出京。噂と事實とは大概此位の差違あるべきか。ホト、ギス到着白川君の鵜飼面白く候
九月二日午後二時

明治四十二年九月七日 午前十一時—午後一時 鐵嶺丸船中 赤坂區田町二丁目一番地松根豐次郎へ〔繪はがき〕
胃病如何。小生健全。今晚大連着。伊香保より航海の方愉快なるべし。もう山から御歸りの事と存じ候
六 日

明治四十二年九月七日 午前十一時—午後一時 滿洲大連大和ホテルより牛込區早稻田南町七番地夏目鏡へ〔繪はがき〕
只今大連着ヤマトホテルと云ふ旅館につく。

夏目金之助

明治四十二年九月七日 午前十一時—午後一時 滿洲大連ヤマトホテルより本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ〔繪はがき〕

君の風邪如何。小生の胃病大分よし。只今大連のヤマトホテル着。隣の室で西洋人の女がしりきにビヤノを弾じてゐる。

六日午後七時

明治四十二年九月十三日 午後十一時—十二時 滿洲大連大和ホテルより牛込區早稻田南町七番地夏目鏡へ〔滿鐵總裁官舎繪はがき〕
九月十四日

御前も無事。小供も丈夫の事と思ふ。此方にも別狀なし。毎日見物やら、人が来るのでほとんど落付いてゐられず。昨夕は講演をたのまれ今夜も演説をしなければならぬ。中村の御蔭で色々な便宜を得た。西村へよろしく。其他の人にも宜敷

〔裏じ〕

是は總裁中村是公の家。旅順の戰場を見て二泊昨日歸り。明十四日北の方へ向け出發の豫定。其後胃が時々いたい。此地は非常に晴れ具合の奇麗な處。

明治四十二年九月十九日 滿洲湯崗子より牛込區早稻田南町七番地夏目鏡へ〔繪はがき〕
今十九日湯崗子と云ふ温泉發奉天に向ふ。同行舊友札幌農學校教授橋本左五郎氏
久々に御面會致し毎日愉快に同行致居候 橋本左五郎

明治四十二年九月二十一日 午前十二時―午後二時 滿洲奉天瀋陽館より千葉縣成田中學校鈴木三重吉へ〔繪はがき〕
是からハルピンに行く積り歸りには朝鮮へ出る。歸る頃に遊びに出て來給へ。かうしてると文學だの
小説だのといふ事は丸で頭の中から消えて仕舞ふ。

〔裏に清國女優二名の寫眞あり〕
こんなのは如何です

明治四十二年十月九日 午前九時―十二時 朝鮮京城旭町總督府官舎鈴木穆氏内より牛込區早稻田町七番地夏目鏡へ〔繪はがき〕
三十日に京城に來て三四日で立たうと思つた所とうく一週間程宿屋にゐた。七日の晩に穆さんの新官
舎に移つてしばらく厄介になる。穆さんが切角親切に來いくと云つてくれるからである。立派な清潔な
家だ。穆さんは馬を二頭持つてゐる。日本なら男爵以上の生活だ。其うち歸る。

十月九日

金之助

明治四十二年十月九日 午前九時―十二時 朝鮮京城旭町總督府官舎鈴木穆氏内より京橋區日吉町國民新聞社内野上豊一郎へ〔繪はがき〕

十月九日

京城 夏目金之助

其後は御無沙汰去月三十日に來り未だ逗留二三日うちに立つ積り。雜誌屋に雜誌新着といふ赤いのほり

があつたから這入つて見たら十月のホト、ギスと中央公論杯があつた。君の小説も小宮安倍杯の論文があ
る。讀まうと思つてまだ讀まない。朝鮮は好い天氣の國だ。

秋晴や山の上なる一つ松

諸君へよろしく

明治四十二年十月九日 午前九時―十二時 朝鮮京城旭町總督府官舎鈴木穆氏内より神田區錦町三丁目錦城中學校野村傳四へ〔繪はがき〕

君が鹿兒島から歸る前に僕は滿洲に旅行した。今京城に來て朝鮮人を毎日見てゐる。京城は山があつて
松があつて好い處だ。日本人が多いので内地にゐると同様である。

十月九日

夏目金之助

明治四十二年十月十九日 午前六時―七時 牛込區早稻田町七番地より麴町區下二番町三十番地野村傳四へ〔はがき〕

僕は昨朝歸つた君は病氣の由大切に御養生をなさい。御見やけは何にもない。癒つたら來給へ。方々へ
禮狀を出すので忙がしくて困る

明治四十二年十月二十二日 午後八時―九時 牛込區早稻田町七番地より朝鮮京城通信管理局官舎矢野義二郎氏へ

矢野君京城では色々御世話になつて難有かつた御蔭で方々見物が出来て萬事好都合であつた。釜山では草梁から矢野君が瀛車へ乗つて船迄案内して呉れた。僕は此間一寸電報をかけた通り去る十七日歸つた。胃はまだ悪いことによれば一つ洗滌して見様かと思ふ。

御禮といふ程のものでもないが今日小包を一つ出したから受取つて呉れ玉へ
奥さんによろしく

右口上迄 草々

十月二十二日

矢野義二郎様

夏目金之助

八四二

明治四十二年十月末(?) 牛込區早稲田南町七番地より大阪市北區中之島朝日新聞社内島房藤雄氏へ
〔初めの部分切れてなし、十行十九字詰の原稿紙第七頁より始まる〕

區劃をなして居る自治團の様なものであります。夫から營口へ行つた時も捕まつて同所の俱樂部で講演をする事になりました何れも一時間位の長さのものです。奉天でも相談を受けましたが日取が一日狂つた爲めとうく逃れました。京城でも切に望まれましたが、何しろプログラムが切り詰めてあるのと、少時でも宅にゐると人が来たり電話が掛つたり碌々飯も落ち付いて食はれない有様だつたので、依頼者も断念して歸りました。

講演以外に苦しんだのは字を書く事です。字は下手だと云つても承知せず句は作らないと断つても容し

て呉れず。甚だ辟易しました。ある所では宿屋の御神さんには非書いて行けと責められて已を得ず宿帳の様なものに分らな「い」事を書いて置いて來ました。京城にそれから會と云ふのがあつて、其會員は娛樂の一法として歌留多をやるさうですが、百人一首を讀む前に何でも一首別の歌を朗讀して音聲を調へるんださうです。所が會の名がそれから會丈あつて、此會員は是非私に其空歌と云ふのを作つて呉れと云ふんです。私は生れて歌なんかよんだ覺はないが、何しろそれから會の名に對しても濟まぬ事と思つて、とうく三首程短冊に書いて置いて來ました。其歌ですか歌は斯う云ふんです。名歌だから御聞きなさい。

高麗百濟新羅の國を我行けば

我行く方に秋の白雲

草茂る宮居の迹を一人行けば

礎を吹く高麗の秋風

肌寒くなりまさる夜の窓の外に

雨を欺くボブラアの音

ボブラアですか。え、彼地には澤山あります。

此度旅行して感心したのは日本人は進取の氣象に富んでゐて貧乏世帯ながら分相應に何處迄も發展して行くと云ふ事實と之に伴ふ經營者の氣概であります。滿韓を遊歴して見ると成程日本人は頼母しい國民だと云ふ氣が起

〔以下略〕

八四三

明治四十二年十一月七日 午後四時―五時 牛込區早稲田南町七番地より京橋區日吉町國民新聞社内野上豊一郎へ〔はがき〕

虚子から催促された夢の如しの評入御覽候。願くは一日に御掲載願候先達停車場へ四方太に逢つたら同人よりも何か書けと云はれ候。以上

十月七日

六三〇

八四四

明治四十二年十一月九日 午後八時—九時 牛込區早稲田南町七番地より牛込區市ヶ谷田町三丁目十一番地中島六郎氏へ

拜啓御手紙わざわざ病中に御認め御厚意難有候露語通譯の件は只今手紙にて中村へ申つかはし候處御推舉の人物はもし先方より何とか申來候節は慥かに申聞べく候

音樂會へは娘をつれてフロックで出掛ました。ソソツカシイので本郷の中央會堂へ行つて仕舞ました。夫から又三崎町へ取つて返した處幸まだ開會に至らず。ことごとく拜聴の榮を得候。小生音樂の耳なく甚だ遺憾たゞ面白く聞いたには相違なけれど恐らく何を聞いても同程度に面白い位の耳なるべく寺田を連れて行かなかつたのを残念に思ひ居候。いくら文學者でも此位の耳では音樂會を天下に吹聴するの勇氣乏しく候

西村はとうとう大連へ参り候在京中は色々御世話になりました。

音樂會の切符を三枚買った處第三女が連れて行つて呉れといふので連れて行きました。切符が一枚足りないから斷つてゐるとそこへもと英文科で教へた人が出て來てなによろしう御座いますといつて入れてくれました。幸田、橘、頼母木等の諸先生が見えました。シーモアと云ふ異人もりました。然しもう少し人を呼びたかつた様です。然らずんばみんなよりぬきの鑑賞家丈をあつめたかつた。私の様なものがあの中に交るのは何だか氣の毒ですが或は私同様の彌次馬が這入つてゐるかも知れません。其彌次馬を勘定に入

れてあの位の入りなんだから氣の毒です

粟餅で發熱したのは珍らしくて愛嬌があります。私はいそがしいからはでやめますあなたの病氣見舞の代りに此手紙を書きます 頓首

十一月九日

夏目金之助

中島六郎様

八四五

明治四十二年十一月二十日 牛込區早稲田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地大塚保治氏へ

拜啓其後は御無沙汰滿韓より歸りて一寸伺ふ筈の處不相變多忙にて失禮致居候
さて思ひも寄らぬ事と御驚きならんが實は今度朝日新聞に文藝欄といふを開店し二十五日頃より始めるに就ては僕の友人などより話をき、又は原稿をもらつて文藝の時事に關する事を記載しなければ立ち行かぬ事と相成たるにより、どうぞ御迷惑でも此男に逢つてやつてくれ玉へ是は森田草平といつて、僕自身拜趨萬事願ふ所を多忙だから代理に頼むのである。

委細は森田より御聞取、朝日文藝欄のスペシアル・コントリビューターとなる事を兎に角御承認を願ふ
いづれ拜眉萬々 艸々頓首

十一月二十日

夏目金之助

大塚様

六三一

八四六

明治四十二年十一月二十一日 午後二時—二時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ
拜啓左の如き端書が来たから面倒でも一寸行つて呉れ玉へ。一三日前同じく端書で月謝を納めると云つて来たが、本人に一先づ聞き合せ様と思つて問合せの手紙を出した。當人は唐津炭坑にゐるさうであるから少々ひまがかゝる夫迄埒を明けるのを待つてもらつて呉れ玉へ

第一、一學期の月謝未納とは何の事だか分らない。一學期が未納で卒業が出来るのかな 以上
十一月二十一日

豐 隆 様

金之助

八四七

明治四十二年十一月二十五日 午後八時—九時 牛込區早稲田南町七番地より牛込區市ヶ谷田町三丁目十一番地中島六郎氏へ 「はがき」
拜啓文藝欄を設けるため度々森田を以て御邪魔を致し不相濟候昨二十四日の音樂會の評難有存候淨書の上二三日中に掲載可致候右御禮迄 草々頓首

八四八

明治四十二年十一月二十八日 午後二時—二時 牛込區早稲田南町七番地より Pei Frau Schmeltzer, Geisbergstrasse 39, Berlin W. 寺田寅彦へ

君が度々手紙を寄こして呉れるのにたゞの一度も返事を出した事がない。正直をいふともらふ度に今度はお出さう／＼と思ふが、あまり溜つてゐるから、書くなら長いものを書かう杯と贅澤を極めてゐるうちに、まあ手近な用を片付けなければならなくなる。實は御存じの通り坐つてする仕事がいくらやつても遣り切れない位積つてゐる。夫で失敬ばかりする。僕は九月一日から十月半過迄滿洲と朝鮮を巡遊して十月十七日に漸く歸つて来た。急性の胃カタルでね。立つ間際にひどく參つたのを我慢して立つたものだから道中非常に難儀をした。其代り至る所に知人があつたので道中は甚だ都合にアリストラチックに威張つて通つて来た。歸るとすぐに伊藤が死ぬ。伊藤は僕と同じ船で大連へ行つて、僕と同じ所を歩いて哈爾濱で殺された。僕が降りて踏んだプラトホームだから意外の偶然である。僕も狙撃でもせ「ら」れ、ば胃病でうん／＼いふよりも花が咲いたかも知れない。

夫からキチナーといふ男がくる。宇都宮で大演習をや「る」。中々賑やかな東京になつた。僕は新聞でたのまれて滿韓ところ／＼といふものを書いてゐるが、どうも其日の記事が輻輳するとあと廻し「に」される。癪に障るからよさうと思ふと、どうぞ書いてくれといふ。だから未だにだら／＼出してゐる。其所へもつて来て此二十五日から文藝欄といふものを設けて小説以外に一欄か一欄半づゝ文藝上の批評やら六號活字で埋めてゐる。君なぞが海外から何か書いてくれ、ば甚だ光彩を添へる譯だが、僕は手紙を出さない不義理があるからヅウ／＼しい御頼みも出来かねる。尤も文藝欄の性質は文學、美術、音樂、なんでもよし。ハイカラな雜報風なものでも、純正な批評でもいゝとして可成多方面にわたつて、變化を求めてゐる。あとで六號活字を愛嬌につける。今はハウプトマン達のゴデキンドだの、逸話見た様なものを載せてゐる。是は小宮が書いてくれるのだが、ぢきに種が盡きさうで困る。まあ食後に無駄な時間でもあつたら繪端書へでもいいから何か書いて呉れ玉へ。評論にしても一回讀切りを主としてやる、どうも長くなると

弱るからね。

近頃はモミアゲの處に白髪が大分生えて御爺さんになつた。昔し教へた御弟子が立派になるから恐縮だ。松根は式部官になつた。森田は文藝欄の下働きをしてゐる。社員にしゃうと思つたら社長があゝ云ふ人は不可ないといふんだから弱つた。

今日は上野に音楽會がある。いゝ天氣だ。行つて見やうかとも思つてゐる。四五日前は有樂座でロイテル氏の御披露演奏會があつた。ピヤノが旨いさうだ。エルグマイステルは君知つてゐる「る」ね。幸田の姉さんが僕の旅行中に休職になつて、すぐ外國へ行つて仕舞つたさうだ。神戸さんが歸つて來た。昨夜は同じく有樂座で森鷗外譯のイブセンのボルクマンを左團次や何かやつたさうだ。是は小山内薫が主宰してゐる自由劇場の興行である。

文部省の展覽會もある。此間見に行つたが、日本人も段々旨くなるね。前途有望だ。不折は不相變ぢや、イの裸をかいた。虎の皮の犢鼻褌をしてゐるからえらい。然し肉の色は甚だ可かつた。背景は拙惡極まるものだ。

僕の家は經濟が膨脹して金が入つて困る。然しまだ借金は出來ない。君の留守にとり／＼ピヤノを買はせられた。歸つたら演奏會をやりなき給へ。君が買へ／＼と云つてゐるから、ピヤノが到着した時は第一位の年の事を想ひ出した。君がゐるなら嘸喜ぶだらうと思つた。筆が稽古をしてゐる。それで來年の春は同じ位が十時の休息時間に僕に何か挨拶をしるといふんだから猶々驚ろく。

僕は此度「それから」といふ小説を書いた。來年の正月春陽堂から出るから送つて上げる。獨乙でハイカラな寫眞を撮つたら寄こし玉へ。今日は好い天氣だ。縁側でこれを書いてゐる。山茶花が咲いてゐる。

もう何も書く事がなくなつたやうだからやめる 以上

十一月二十八日

金之助

寅彦様

八四九

明治四十二年十一月二十九日 午後八時—九時 牛込區早稻田町七番地より牛込區市ヶ谷田町三丁目十一番地中島六郎氏へ

拜啓文藝欄設立につき御援助を願ひ候處早速樂界の爲に御奮ひ被下難有既にロイテル氏披露會の御評を賜はり又秋季演奏會の御評も頂戴深謝の至に不堪候

然る處先日ロイテル氏の分はあれでは文藝欄の五號批評としては一般の讀者に通じがたきにつき森田に命じてあれをまとめて一篇の概括的批評文を作らしめ候、處が森田は音樂に對して零の智識を有し候事小生と同一につき遂に尊意を誤まり候箇所など相生じ候由實以て申譯なく恐縮致候。時間さへあれば一應御檢閲を仰ぐ處なれど取いそぎ候爲め事實大兄に對し失禮を敢てしたると同一の結果に陥り甚だ濟まぬ事に相成候わるい氣ではないのですからどうぞ御ゆるしありて、勇氣沮喪を御禁じ下さつて何卒御盡力を願上候

西村君の評は自分の義務と思つて書いた事と存候。元來編輯會議では文藝欄を設けないでも藝術文學の批評はやるのだからさう云ふ種類のものをまとめて小生の管理の下に該覽中に收めたらよからうと云ふ相談故、強く抗議を申込みやめさせる事も出來候へどもあれはたゞ雜報の筆がすべつたもの位に見逃しても差支ないと存候是亦漸次改良の積故さう一時に御立腹なく完成の機迄御見届願上候

秋季演奏會の御批評は都合上或は六號にて全部掲載するやも計りがたく候につきあらかじめ御含み願上候猶訂正の箇所(もしあれば)時間の都合にて一應入貴覽る積なれど萬一間に合はぬ時はすぐに出し可申間どうぞ御勘辨を願候其代り充分注意可致候

右御返事迄 艸々頓首

十一月二十九日

金之助

中 島 様

八五〇

明治四十二年十一月三十日 午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より府下澁橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ (はがき)

玉稿たしかに落掌御多忙中難有存候紙面の都合次第掲載可仕候

只今森田氏不在につき小生より御禮申上候 艸々

十一月三十日

八五一

明治四十二年十一月三十日 午後十二時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小宮豊隆へ (はがき)

少々御相談申上度事有之明一日早く御出願はれ候や

右用事迄 草々

十一月三十日

八五二

明治四十二年十二月三日 午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より神戸市中山手通四丁目二十番地淺野方更新へ

拜啓御手紙拜見金圓御用立の件御申越の通御返却にてよろしく候其地の學校は萬事意外の事のみにて定めて面白からぬ事と被察候がまあ當分御辛抱可然かと存候只今多忙にて長い返事をかく譯に參らず候故是にて御免蒙り候。先達てはアナグマの皮御一枚惠投にあづかり深謝致候あれは何にしたらよきやチャンヂヤン可然か序に御教へ願候先は右迄 草々

十二月三日

夏目金之助

東 新 様

八五三

明治四十二年十二月三日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より府下澁橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ

御手紙拜見かねての講演御催促にて恐縮致候が御承知の如く文藝欄開店の爲め事務不少其上滿韓ところを今月中つゞけた上に、新年の阪朝に十日つゞき位のものを書く事に相成何とも思索の餘地無之甚だ違約がましく不快なれどどうぞ事情御諒察の上御勘辨被下度候

右御詫迄 艸々頓首

十二月三日

夏目金之助

阿部次郎様

六三八

八五四

明治四十二年十二月十五日 午後八時—九時 牛込區早稻田南町七番地より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓其後は打絶御無沙汰に打過不本意至極に候滿洲より歸朝後多忙日〔に〕加はり愈厄介と相成降參の體に候。大兄御變りも無く日々事務御勵精の事と存候不堪慶賀の至却説御親切にわざわざ御惠投の鑑詰御書狀と前後到着難有拜受致候東京は今日より頗る寒氣加はり手水鉢に氷が張り候。御地も段々冬となる事と存候御加養專一に存候右不取敢御禮迄 艸々頓首

十二月十五日

夏目金之助

渡邊様

八五五

明治四十二年十二月二十二日 午後六時—七時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地ろノ七號増田方林原(當時岡田)耕三へ

拜啓其後は失敬試験を休んだ由どうして休んだのか、無暗に缺席をしては不可ない。あとから受けられるかね。

どこかへ行くなら行つて來給へ。正月に御出で 以上

十二月二十三日

金之助

耕三様

八五六

明治四十三年一月二日 午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より磨下澁橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ〔はがき〕

恭賀新年

能勢が來て君に「それから」を評してもらへと申します。さうして本を一部送れと申します。本は便次第送ります。御批評は願ひます。(朝日文藝欄なら二三回以下にて)

八五七

明治四十三年一月三日 午後一時—二時 牛込區早稻田南町七番地より磨兒島市春日町三十九番地濱崎氏方皆川正禮へ

恭賀新年

忙がしいから端書で失禮當地も暖かな好新年である。謠は御勉強の由御出京の節御相手可致候

八五八

明治四十三年一月三日 午後一時—二時 牛込區早稻田南町七番地より伊豆國修善寺新井方林原(當時岡田)耕三へ〔はがき〕

恭賀新年

「それから」は一部上げる積で居たのに惜しい事をした

三日

六三九

明治四十三年一月四日 牛込區早稲田南町七番地より千葉縣成田町谷津鈴木三重吉へ〔はがき〕
謹賀新年

今年より御活動のよし大慶の至に存候
一月四日

明治四十三年一月十一日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕
古本御序の節御求めを乞ふ 代金はあとから御返上可致候 以上

明治四十三年一月十四日 午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より京都市二條川東疏水西厨川辰夫氏へ
拜啓朝日文藝欄に御同情被下玉稿わざ／＼御寄送被下難有御禮申上候小包は只今到着いまだ拜見不仕候へども慥かに落手致候。舊冬中よりの原稿少々たまり候上前日掲載ものゝ反駁やら何やら参り且つ其間に起る時事に就て少々は意見を發表する必要も刻々起り候故出来る丈早く掲載の積には候へども多少の時日を要し候事故其邊はあしからず御含置願度候
又雑誌の原稿も同時に着是も出来る丈早く御希望の通に取計ふ所存に御座候中央公論が不可なければ外の雑誌をも聞き合せ可申其節は今一度御問合可致候

「それから」御ほめにあづかり難有候
右不取敢御返事迄 草々頓首

一月十四日

夏目金之助

厨川辰夫様

明治四十三年一月十九日 午後六時—七時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕
拜啓此間の池松常雄氏（赤城元町三十四）へ二十四日の會の番組とくる様に案内とを出す様にカンノウさんか高野さんに電話で頼んでくれ。何か役をつける事も頼んでくれ。うまい人だから尊敬した役をつけるがいゝと云つてくれ

明治四十三年一月二十一日 午前十時—十一時 牛込區早稲田南町七番地より 59 Alredale Avenue, Chiswick, London 大谷正信氏へ
拜啓其後は御無沙汰御地着の上只今はもはや御落付御研究最中と存候
御出立後東京も別段の變化無之。正月も例年の通り。降雪二回。曇日は寒き方に候。倫敦抔防寒的に家屋の構造の出来てゐる處は却つて我々の書齋よりも遙かに暖國に候。芝居其他御遊覽に相成候や。倫敦ほど難駁な處は世界中にこれあるまじく考へ様次第にては内地よりもずつと呑氣なものに候へば久し振りにて老書生に立ち歸り勝手に世帯の苦勞なく御消光可然と存候

「それから」出版致し候につき一部此手紙と同便にて進呈致候。日本の小説杯却つて御歸りの時の御邪魔にも相成るべくとは存じ候へどもかねて御愛讀を辱ふせる御厚意に對する記念として差上候もの故御落手被下度候

昨年未より朝日(東京)紙にて文藝欄なるものを開始し、毎日一段もしくは一段半位の批評もしくは文藝上の論文杯か、け居候。其下に六號活字にて柴漬と申すものを置き是には西洋の雜誌杯より通信、消息、報道等人の面白がりさうなものをごちや、くにならべ居り候。大體一項十行内外に候。

御地御見聞上の事にてもし現下日本の文藝上の時事問題に直接もしくは間接に關係ある御意見もしくは報知も有之候は、時々御寄稿被下度幸不過之候。又どこかへ御遊覽の節(ハンプトンコート杯)繪端書の裏へ寫生文の様なもの五六行御書き被下候へば消息として今申したる柴漬の後へ載せたき考に候。

どうせ新聞故大論文や長時間を費やすものに就て御迷惑をかける料簡にては無之。たゞ霧が降つて人の顔がほんやり映るとか、ショーの脚本をどこ座で見たが面白くなかつたとか、何とか云ふ事を五六行にてよろしく。もし又一二時間の御閑も有之ば文藝欄の五號活字として載せ得るもの一欄か一欄半位にて讀み切りのもの……何とか蚊とか手前勝手のみ申し募り候。御笑ひ可被下候 草々

一月十九日

夏目金之助

繞石老臺

座下

八六四

明治四十三年一月二十一日 午後二時—三時 牛込區早稲田南町七番地より府下大森八景坂上杉村廣太郎氏へ

拜啓本日御葬送とは存候へども本門寺ではちと遠方故失禮致候

此間中より毎々俱樂部の御馳走に相成好都合至極何か御禮と思へど大した思付もなし。幸ひ今迄拙著を進呈したる事なき故珍らしくてよろしからんと存じ近刊それから一部座右に呈し候中に何か書かうと思へども本屋の方で小包用につゝんである故まつい字杯はと考へ直して其儘差出候

御葬式其他にて嘸かしの御混雜の際に閑言を弄し恐縮なれど氣の付いた時出さないと人が來てそれから夫へと奪つて行く故あるうちにと存じ敢て場合を顧みず。失禮御高免の事。猶萬事了畢後の道體保安を祈る 草々頓首

一月二十一日

金之助

楚人冠盟臺

座下

八六五

明治四十三年一月二十一日 (以下不明) 牛込區早稲田南町七番地より府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ

御手紙拜見致候美學會の件につき何遍も御手数をかけ不相濟る事と存候が其後始終ごたく致し毫も頭に餘裕無之甚だ残念ながら「出來た時に」と云ふ條件にて延期を願ふより外に致し方なくと存候右不取敢御迷惑ながら御返事申上候 早々

一月二十日

六四三

阿倍次郎様

夏目金之助

六四四

八六六

明治四十三年一月三十一日 午後零時—一時 牛込區早稻田町七番地より府下葉鳴町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ
拜啓八重子さんの赤ん坊の事で此間から心配してゐた處昨日の手紙で安産のよしを聞いて漸く安心した。男子の上發育も充分御産も軽かつた由何より結構の事無人で御困り嘸かして御察し申候二日徹夜では定めし弱つたらう猶是からが大變だ中々八釜敷ものだよ 先ば不取敢御祝迄 草々

一月末日

金之助

豊一郎様

八六七

明治四十三年二月二日 午後五時—六時 牛込區早稻田町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕
拜啓「通盛」が君の所に行つてゐるやしないか。もしあつたら明日の木曜に持つて来てくれ玉へ。此間七騎落を西神田俱樂部へ置いて來ちやつた

八六八

明治四十三年二月三日 午後一時—二時 牛込區早稻田町七番地より府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ

拜啓森田へ御端書の所當人事文藝欄休刊多き故日々出勤仕らず御返事が後れ候ては不相濟と存じ小生より申上候

過日の原稿は難有頂戴。よせ鍋中癡郎と有之候處あまり匿名のみつゞきては面白からず本名の時樓を名乗つては如何と小生案じ煩ひ候に森田差支なかるべしと申出候につき御本名を書き加へ候。それからよせ鍋では薩摩汁の前後に(編輯上)鼻につき候故何とか工夫なきやと相談致し候折勢成君一讀「自ら知らざる自然主義者」ではどうだと發意一同贊成右に決し候。次に肝心の御抗議の花袋咆鳴の件は實を云ふと草平の提案にて改正致候もの「に」有之候。

右は僭越にも尊稿を改めたる個所及び事情に有之。楮右につき御申越の趣委〔細〕承知致候。さう眞正面から御切り込みになりてはたゞ叩頭罪を謝するの外に道なく候が、さう嚴肅に權利問題とせず少々此方の開陳する所を御清聴に達し度候間御怒りなく御聴取被下度候

小生は大兄と今日迄左したる交際無之従つて玉稿を隨意にどうするのといふ考は(親疎の關係上よりして)起らぬ次第なれど、大兄と二三子(たとへば草平能成豊隆の如き)との間柄は此位なフリードムを敢てしても御氣にさわらぬ程の圓熟せる御交際かと承知致し候ため、其際は何の氣もつかず、許諾致候。是は小生の粗忽とも云ふべきか平に御高免にあづかり度候。其上花袋咆鳴云々を改めたる所が貴論の本旨に殆んど大した影響を與へぬ程な些末な點と愚考致したる故左迄御氣にもかゝるまじと早斷致候次第に候。左れば個人としての大兄に侮辱を加へると云ふ了見は毛頭無之又此方の便宜の爲に貴意を顛倒錯亂せしめたるといふ自覺も無之御手紙を頂戴する迄は至つて香氣に構居候。小生の寧ろ難色ありしは題を勝手に改め匿名を雅號に修正する方に有之候ひき。其時小生は阿倍君が怒りやしないかと念を押したる位に候。

右は事情を申上げて幾分か此問題を法律的なる權利問題より遠からしめんとする辯護に有之候。又事實

六四五

問題として修正の箇所（花袋咆鳴云々）が左程貴論にダイタルならざりしならんとの辯解に候。

辯護も辯解も只緩和劑に候。是にて大兄の御不満が少しにても取れ候へば小生は難有仕合に存候

御承知の通原稿は先月末に出すべき筈の處議會にて始終休まれる爲め延々になり居候處昨日森田電話にて掛合此次に組込む筈に致候旨申來候につき時日切迫の爲め或は貴意の如く元の通りに致しかね候やも計りがたく候へども正誤の件可成早く何（と）か分別可致。御目にかゝり御話をすればよけれどかけ離れ居候爲め無重寶なる筆にて御詫を入れ申候あしからず御有願候 草々

二月三日

夏目金之助

阿部次郎様

諸方より來る原稿中削除もしくは書改める事有之。是は原稿が文をなさざる場合にのみ限り候。又は少し手を入れる事あり。是投稿者へ却つて敬意を表する場合にも致候。大兄のとは全然趣を異に致し候故是も序に申上置候

八六九

明治四十三年二月三日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より牛込區大久保余丁町百〇六番地安倍龍成へ

御手紙拜見致候先達ては失禮致候御來旨の趣は阿倍君よりも森田へ問合せ來り候處森田參らざる故小生より返事を出し置候

花袋云々の件は阿倍氏の書き方の前後より押しして毫も全篇の主意に痛痒を與へざるものと見做したる故森田より相談を受けたる時夫でもよろしからんと申候。森田の考は阿倍君とあすこの處丈が違つた故に訂正を申し出したるならんとは其時存じ候。人の書いたものを一字でも手を入れる事に許諾を與へたるは阿倍氏は森田小宮杯と親交ありて、あの位の事はあとから斯う云ふ譯だと話せばあゝさうかと笑つて仕舞ふ位の間柄と思ひし故に候。權利問題を呈出されて事が六つかしくならう杯と想像し得る程の大關係の箇所とも思はず、又森田對阿倍の關係が夫程フォーマルに禮儀を盡さねば手落となりて後で抗議を受けるとも思ひ居らざりし故に候。

小生は文藝欄擔任記者として凡ての論文に對し自ら責任を負ふ積り故文章が意味を爲さざる場合は森田に書き直させ候事も有之候。又長ければつゞめさせる事も有之。右兩様共寄稿者並びに文藝欄の體面上雙方の便宜と思ふ場合に有之。従つて是等の場合は寄稿者に寧ろ尊敬を拂ひし爲の手續と考へ居候。阿倍氏のは右兩様の場合は異なり。却つて懇意づくより他の原稿を多少どうかし得るフリーダムありと信じたる親密を森田阿倍兩氏の間測定せるより起るものに候。

此測定が人を侮辱せるもの也との抗議ならば不敏を謝するより外無之候。謹んで大兄と阿倍君に御詫び可致候。

有體に申候へば今の所謂自然派（自然派をかたち作る人物）が嫌に候。是は其説が如何にも粗漏放漫にして相手の人格及び意見に對して毫も敬意を拂はざる表現法をのみ用ひるが故に御座候。かの人々自らのコンシトを撤回せざる限りは到底かの人々の議論に對し敬意を拂ひがたく候。敬意を拂ひ得る丈に議論は周到ならず、態度は士君子流ならざる故に候。この嫌惡の情の爲に左右せられて森田の提議に應じたるかの質問に對しては寧ろ然りと答へるの事實なるべきを公言致したき位に候。去れども徹底に彼等兩人

は自然派たり得ずと理智の判断に支配^原されたるも事實に候。最後に尤も多く余を動かしたるはどうでも好い所だと云ふ念と、懇意づくの間柄だからと云ふ心持とに候。夫が貴兄等の尤も癪に障つた所だらうと後悔致し候。論議は公正ならざる可らず、意見は不偏不黨ならざる可らざる事は御説の如くに候。小生が許諾を與へて訂正せしめたるも此公平と不偏不黨を傷けざる範圍内の出来事位に暗々の裏に思惟せるとしか自分には考へられず候。夫を然らずと御思ひありては只恐縮の外なく候へども致し方も無之候。小生はあの時大兄の題をつけかへて、匿名を時樓に直したる森田の舉動を寧ろ不穩當と感じいさゝかためらひ申候へども、前述の通り是も懇意づく故君等がリバーチを與へられたるものと信じ矢張り承諾致候。小生不行届にて諸君子に煩を及ぼし慚汗不少候。右返事により幾分か小生の心意を致すを得ば幸に候。猶期御面會申候 以上

二月三日

安倍勢成様

夏目金之助

八七〇

明治四十三年二月六日 午後二時—三時 牛込區早稻田南町七番地より府下葉崎町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ「はがき」
拜啓虚子轉地の由編輯御多忙ならんと存候。小生此間の謠會に七騎落を西神田俱樂部へ忘れし様なり、御序の節幹事に願つて取つてもらつてくれ玉はぬか右御願迄、 八重子さ「ん」赤坊共御健勝の事と存候

八七一

明治四十三年二月十日 牛込區早稻田南町七番地より栃木縣芳賀郡山前村字道祖土高松甚一郎氏へ
御手紙拜見私のおものを御愛讀被下るよし難有い事でどうぞ今後も御讀を願ひます。近頃の本でノンビリと氣の樂になる様なものはあんまりありません。私の友人の高濱虚子といふ人の書いた俳諧師といふのがあります。民友社の出版で並製壹圓以下と覺えてるます、あれでも讀んで御覽なさい右御返事迄 草々

二月十日

夏目金之助

高松甚一郎様

八七二

明治四十三年二月十六日 午後二時—二時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ「はがき」
柴漬難有頂戴明木曜日もし御光來なら本郷で掌中醫方と申す小冊子（壹圓程か）を御買求め被下度右願上候 草々

二月十六日

八七三

明治四十三年二月二十日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ
別紙の如き端書参り候御序の節御返事御出し被下度候當用のみ 草々

二月廿日

金之助

豊隆様

八七四

明治四十三年三月二日 午後十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區第一高等學校寄宿舎東寮十一乙林原(當時岡田)耕三へ
拜啓二月記念祭にて切符わざわざ難有候小供生憎學校にて参るひまなく残念に候いづれ拜眉萬々
本日の新聞には會の景況色々記載有之候大分賑かの様被存候小説執筆中にて多忙今度はゆるゆる
書いて居候

三月二日

夏目金之助

岡田耕三様

八七五

明治四十三年三月四日 午前十二時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より Bel Frau Schmeltzer, Geisbergstrasse 39, Berlin W. 寺田寅彦へ
端書拜見其後御變りもなき事と存候。今度音楽家で山田といふ人が岩崎の金で柏林へ留學する幸田の所
をたよる由。此人の友人で筆の先生の中島さんから君へも序に頼んでくれといふから一寸御報知する。何
かの機會もあつたら世話をしてやつてくれ玉へ。

段々春めいてきて少しは暖かになつた。昨日湯に入つたら今朝始めて鶯をききましたよ。まだ下手です
ねと云つてゐた。宅では簞笥の上に御雛様を飾つてゐる。山田といふ奥さんから虎屋の雛の菓子をもらつ
て飾つた。二日の夜明に又御産があつて大混雜。又女が生れた。僕は是で子供が七人二男五女の父となつ

たのは情ない。鬢の所に白髪が大分生えた。又小説をかき出した。三月一日から東京大阪兩方へ出る。題
は門といふので、森田と小宮が好加減につけてくれたが、一向門らしくなく困つてゐる。小宮も森田
も中々有名になつた。虚子が去年の末腸チフスをやつて漸く快復したがまだ衰弱してゐる。其他異狀なし
草々

三月四日御天氣のいゝ日

金之助

寅彦様

八七六

明治四十三年三月十一日 午前十一時—十二時 牛込區早稲田南町七番地より府下築碯町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ
雜誌拜受玉稿面白さうなれど未だ讀まず。あの六號活字は誰が書くにや。僕と楚人冠と確執してゐる様
に書いてある。僕が十五二十四兩日に幹部會議に出るため社へ行くと會議の濟むのが何時でも午頃になる。
すると楚人冠が何時でもおい夏目君飯を食ふぢやないかと僕を誘つて表へ出る。さうしてつい傍の交詢社
へ行つて會食する。僕は俱樂部の會員でないから費用は何時でも楚人冠の擔任だ。僕は楚人冠の誘を受け
るとうん御馳走し玉へと云つて一所に出る。是ぢやあまり確執でもあるまい。

蒼瓶がジョナリズム(自然派攻撃)の非難を書いた時、楚人冠が新聞界で自分のやつてゐるジョーナリ
ズムの意味にとつて反駁した事がある。其時僕はストーブの前へ君あんな事を書くよと君と僕と喧嘩してゐ
る様に世間で思ふよ。かくなら文藝欄のうちへ書かないかと云つたら、楚はうんさうかと云つてゐた
六號杯はどうでも好いが是も一つの材料だから虚子が霞寶會の事を辯じた様に風聞録か杯ぞへ六號へ事

實を書いて呉れないか。たゞし僕が自分で正誤する程なら自分の新聞でやるから、そこは君の取計で如何様にも願いたい。尤もこんな事は始終あるから別に氣にもならないから、君の方の都合が好かつたら材料として使つて貰はう位の所に過ぎない 草々

三月十一日

金之助

豊一郎様

森田のやつこが楚人冠へ答辯をかけた時は僕に原稿を檢閲す〔る〕ひまを與へずすぐ社へ持つて行つた。あれを僕は書き方がよくないと叱つた位だ

八七七

明治四十三年三月十二日 午後十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕

拜啓ルンドシャウ一、二月號同時に着。瞥見するにあまり材料なき様也。御序の節可差上候 草々

十一月二日

八七八

明治四十三年三月十三日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より府下東鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ〔はがき〕

本日風聞録で楚人冠記事拜見御手数難有候。ミナも拜見あれは面白く候此前の新小説のと共に佳作に候。「赤門前」よりはよろしく候

八七九

明治四十三年三月十三日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區第一高等學校寄宿舎東寮十一乙林原(當時岡田)耕三へ

御手紙拜見指が痛いつて云ふのは何の病氣かね醫者にはかゝつてゐるのかね、指が痛くつて筆が持てな

くつては學生は出来ない位だ養生をしなくつちや不可ない
人世觀とか世界觀とかいふものは段々變るものだが其時其場合には誰にもしつかりした處があつて欲しい。何物にか逢着したのは君の仕合だ

印は押し候 草々

三月十三日

金之助

耕三様

八八〇

明治四十三年三月十八日 午後四時—五時 牛込區早稻田南町七番地より麴町區九段中坂望遠館松根豊次郎へ〔はがき〕

御歸京の由、御父さんの病氣は如何。此間少々用事あり七時頃君の處へ行つたら、今御國へ御歸りと云つた。用事は今濟んだ。何れ其うち、御産は安産、性は女子、名づけてひなといふ三月二日朝三時の生れ。

八八一

明治四十三年三月十九日 午前六時—七時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ

拜啓永井荷風氏より別紙の通申來候條件次第にて御引受可然か、小生より返事するか又は君が直接に荷風氏と交渉するか何れでもよろしく候

柴漬の参考の米國新聞いまだ机上にありどうぞ御序の節御返し願候 草々頓首

三月十八日

金之助

豊隆様

八八二

明治四十三年三月十九日 午後八時—九時 牛込區早稻田南町七番地より府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ〔はがき〕

拜啓原稿頂戴致候。近頃文藝〔欄〕不規則にてすぐ出す譯に參らず。御氣の毒に候。上の方はすでに編輯へ廻し置き候御禮迄 草々

三月十九日

八八三

明治四十三年三月二十三日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より府下西大久保百五十六番地戸川明三氏へ〔はがき〕

今日能不參に候。御手紙昨夜着今朝披見御返事後れ申候。來月の霞寶會の能には壇風有之是には是非御招待致度と存居候 早々

八八四

明治四十三年三月二十九日 午後五時—六時 牛込區早稻田南町七番地より千葉縣成田町鈴木三重吉へ

御手紙拜見春雨の候御地は如何。淋しい由。色々な意味にて誰も淋しく候。小鳥の巢毎日拜見随分御苦心の事と存じ候へども書きかけたもの故是非共始末を奇麗に御付可被成候學校授業執務の外に小説を毎日書くのは定めて御難義とは存居候。小生は胃の加減わるく氣に任せて長く筆を執ると疲勞する故大抵毎日一回位で胡魔化し居り候、いづれ委細は御面晤 草々頓首

三月二十九日

金之助

三重吉様

八八五

明治四十三年三月三十日 午前八時—九時 牛込區早稻田南町七番地より麴町區元園町一丁目武者小路實篤氏へ〔はがき〕

拜啓白樺一號御惠送にあづかり拜受。巻頭の「それから」評未だ熟讀不致候へども直ちに一寸眼を通し候。拙作に對しあれ程の御注意を御拂ひ被下候のみならず、多大の頁を御割愛被下候事感佩の至に候。深く御好意を謝し申候。御批評の内容は未だ熟讀を経ざる事故何とも申上かね候へども所々肯綮に當り候所も多き様に存候。中にも「それから」が運河だと云ふのは恐らく尤も妙なる譬喩ならんと存候。「それから」のとめ方の御辯護もあの通りの愚見にて候ひし。先は御禮迄 草々

八八六

明治四十三年四月六日 午後五時—六時 牛込區早稻田南町七番地より麴町區元園町一丁目武者小路實篤氏へ〔はがき〕

拜啓「代助と良平」頂戴難有候都合次第掲載可致候間しばらく御猶豫願上候。右御禮迄 草々
(森田参るべき處多忙にて電話にて御迷惑願候事と存候御免被下度候)

六五六

八八七

明治四十三年四月十日 午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より清國湖北省沙市日本領事館橋口貢氏へ

拜啓御出發の際は御見送も不致海陸御無事御地に御着のよし大慶の至に候春雨濛々とか黄鶴樓とか申す言葉をきくと是非一遊致し度相成候當地も春景色にて諸新聞ともに花信を掲載致居候處生憎筆に崇られ外出不仕憫然の至に候。朝日文藝欄にては時々清君を煩はし畫界の事に關し御執筆願居候。御地にて何か面白き報知も有之候は、同欄のなかへ掲載致度考に候。どうも文藝欄を擔任してより商買氣多く相成困入候。書畫骨董隨分御清賞不淺事と存候 草々

四月九日

金之助

橋口 貢 様

八八八

明治四十三年四月十一日 午後一時—二時 牛込區早稲田南町七番地より麴町區元園町一丁目武者小路實篤氏へ (はがき)

御端書拜見致候あの文句を玉稿中に挿入する事はどこかッギの出来る様な氣がして、どうも旨く行きませんから已めました。右あしからず。御旅行の由充分の御保養を祈る

八八九

明治四十三年四月十二日 午後零時—一時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ

貴墨拜誦再度申上候。自然主義が滑つても轉んでも小生も毛頭異存無之候へども、自然主義を振り廻す人と同商買故何うでもよくなり候。それから自分は何うでもよいとしても斯ういふものに支配される若い人が澤山有之候故、矢張り何とか蚊と「か」誤訛をならべて文藝欄を賑はし、且つ其人々にあまり片寄らぬ様な所見を抱かし度考になり候。

然し毎日自然主義がどうしたとか斯うしたとかにては小生も讀者も大兄も辟易故、たまには大兄の御得意の鳥獸草木も是非御紹介を願度候。然し根が新聞故講義體に堂々と例證ばかり出てきて何日もつくと困り候故、一般讀者並びに文藝好の人に興味のある様な事にて八十行位で一寸面白く讀まれ得るもの「の」切望に候。然し此方から注文を出す又六づかしく相成恐縮致候が、もし御閑もあらば御含置の上たまには御認め被下度あらかじめ願置候 艸々

四月十二日

金之助

芥 舟 様

八九〇

明治四十三年四月十六日 午前十時—十一時 牛込區早稲田南町七番地より千葉縣成田町鈴木三重吉へ (はがき)

拜啓小鳥の巢は題名の通り小鳥の巢に至つて始めて君の眞面目を發揮致し候。あゝいふ事の敘述は今の

六五七

文壇無之。従つて甚だ興味深く候 草々

八九一

明治四十三年四月二十二日 午後五時―六時 牛込區早稻田町七番地より佐賀縣神埼郡三田川村若野行徳二郎氏へ

拜啓其後は御無沙汰に打過候過日俊則君御歸郷の砌り一寸御近況を伺ひ候當時は學校をやめて御郷里にて御静遊のよし奉賀候

兩二日前御惠投の苗木芽生數種到着幸ひ植木屋參り居候故直ちに適當の所を擇ひ植付來春に至り花頃に植かへる事と致候御多忙中御親切の段深く感謝致候不取敢右御禮申上度草々如斯に候 頓首

四月二十二日

夏目金之助

行徳二郎様

御兩親様ならびに御令兄へよろしく願上候

八九二

明治四十三年四月二十九日 午後三時―四時 牛込區早稻田町七番地より茨城縣結城郡岡田村長塚節氏へ

拜啓其後は御無沙汰に打過候緒先般は森田草平氏を通じて突然なる御願に及び候處早速御聞届被下候段感謝の至に候其後草平君より再度の照回^原に對する御返事正に拜見致候小生の小説はいつ完結するや實の處本人にも不明に候へどもごく短かくても九十回にはなるべきかと豫想致居候只今六十回故今より御起草被

下候へば小生も安心。萬々一の事にて夫よりも早く片付候ても毫も心配無之故失禮をも不願伺候次第に候御返事の趣にて一旦御引受の上は不都合なき由御申聞難有候東京と茨木^原とは少々懸隔居候故自然懸念も相生じ杞憂相洩し候様の譯あしからず御高免願上候右御挨拶旁御願迄如斯に候 草々頓首

四月二十九日

夏目金之助

長塚様

八九三

明治四十三年五月二日 午後八時―九時 牛込區早稻田町七番地より麴町區元園町二丁目一番地武者小路實篤氏へ〔はがき〕

玉稿はたしかに入手致しました。都合つき次第掲載致します。毎度御迷惑をかけて済みません。此後も時々願ひます。白樺も慥かに頂戴。右御禮迄 草々

八九四

明治四十三年五月三日 午後十一時―十二時 牛込區早稻田町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕

啓安奉線は御申越通りならんと思但しよく知らず、もう一つの方はあれで慥かに宜しい。君の時計らしいのが忘れてある。催促も探索もしないところがえらい。東さんにトルストイの御禮を云つてくれ

八九五

明治四十三年五月十一日 牛込區早稻田町七番地より鹿兒島市春日町三十九番地濱崎氏方皆川正禮へ

拜啓其後は御無沙汰奉謝候御手紙難有拜見致候近來は東京朝日に文藝欄を設け諸君子の文藝上の意見を紹介致し居候獨文の方は中々活躍英文の方は少々振はず候ちと御投稿如何に候や

謠は小生も熱心に候此夏御上京の節は御相手致度候

「門」御愛讀被下候よし難有存候近頃身體の具合あしく書くのが退儀にて困り候早く片付けて休養致し度、今度は或は胃腸病院にでも入つて充分療治せんかと存候四十を越すと元氣がなくなり申候

野間君も健在の事と存候よろしく

御職業の事精々心掛可申候随分困難につき御邊は御承知願上候

野村も一度は地方へ參る由申居候

先は御返事迄 草々

五月十一日

夏目金之助

皆川正禧様

八九六

明治四十三年五月二十二日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より清國湖北會沙市日本領事館橋口貢氏へ

拜啓其後は御無沙汰致候御地着後新らしき山川人情定めて御眼新らしき事と存候

當地櫻も散り若葉の時節。昨二十日は英國先帝の遙拜式有之大分盛大の模様、白馬會と太平洋畫會と同時に開會賑やかに候。小生胃病烈しく外出を見合せ世の中を頓と承知不仕候

御送の寫眞數葉着御好意深謝致候日英博覽會記念繪葉「書」一組御目につかけ候スタンプは押してなく候

へどもそれは差支なくと存じたゞ葉書のみ差上候

先は御禮迄 艸々

五月二十一日

夏目金之助

橋 口 様

八九七

明治四十三年五月二十二日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より佐賀縣神埼郡三田川村吉田行徳源誠氏へ

拜啓未だ不得拜眉の榮候處愈御壯勝奉賀候御令息俊則様並に二郎様にはかねてより御近づきの事とて時

時色々の用事忪相願ひ失禮のみ重ね居候

今度二郎君御出京につき保證人御依囑につき印形丈押し申候外別に何の御役にも立ち不申不本意の處わ

ざわざ御禮狀被差遣却つて汗顔の至に候

二郎氏御出京の節は結構なる御土産頂戴是亦深く御禮申上候

右御返事旁御挨拶迄 艸々

五月二十一日

夏目金之助

行徳源誠様

八九八

明治四十三年五月二十三日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田町七番地より府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ
拜啓「それから」に就き御丁寧なる御批評難有頂戴御多忙中甚だ恐縮致候實は「それから」が拙著なるの故にあの様に委曲なるものを三日もつゞけて文藝欄へ出して場所を塞げるのが少々面目なき心地致候。是は御論の内容とは丸で關係なき只小生の氣がねに候。種々配合の都合も有之候へば森田とも相談の上掲載の日取取極度しばらく御猶豫願候。玉稿最初の一句宿約云々は削除致しても差支なくや一寸伺ひ候。大の進まぬのをわざと書かして自己の文藝欄で吹聴する様にて恐れ候。實は新刊の書物ももつと澤山文藝欄で批評して居るとこんな時には遠慮が入らなくてよろしけれどついひまなく森田も多忙にて其方を怠り候ため一寸勇氣を失ひ候。

玉稿の内容は面白く候ことに會話などに作爲のあとあるところ御同感に候其他御説として伺ひても小生のしか思はぬ點も有之候。

消極的の衝氣のみならず積極的にも大分あるやに見受られ申候。だから小生は自分の作を本になつてから讀んだ事は無之候。近頃四篇のうち文鳥と申す短篇を收め候を豊隆が校正致し大いに賞め候故こわごわながら讀み返し候處は左のみ厭味も感じ申さず候ひし。何事も書いてるうちが花に候後を振りかへると冷汗のみに候。

「四篇」もし御入用なら差上可申候

右御禮旁申述候いづれ拜眉萬々 艸々

五月二十三日

夏目金之助

阿部次郎様

八九九

明治四十三年五月二十四日 午前六時—七時 牛込區早稻田町七番地より府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ〔はがき〕
御返事拜見致候。二葉亭の全集に就ては社と特別の關係もある事故是非何か書きたくと存候已を得ねば又魯庵先生でも煩はし度と思ひ居候が、大兄もし御閑なら其方を先にして「それから」の前に出して下さい餘裕ありや一寸伺ひ候。一存にては二葉亭と「冷笑」でもやつたあとに「それから」を廻し度と存候

九〇〇

明治四十三年五月二十八日 牛込區早稻田町七番地より牛込區辨天町百七十二番地山田繁氏へ
拜啓先日は失禮其節御あづかり申上候玉稿あれからすぐにホト、ギスへ送り申候處早速同君より別紙の如き返事参り候間御目にかけて候
猶同君の意見向後御述作上の御参考になりて可然かと存候 草々

五月二十八日

夏目金之助

山田茂子様

九〇一

明治四十三年五月三十一日 午後一時—二時 牛込區早稻田町七番地より府下大久保仲百人町百五十六番地戸川明三氏へ〔はがき〕
啓四篇と申すもの拵らえ申候間御目にかけて申候いづれ拜眉 艸々

九〇二

明治四十三年五月三十一日 午後一時十二時 牛込區早稻田町七番地より府下東鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ〔はがき〕
此間中より度々手紙頂戴。原稿も頂だい面白く候。近著四篇今度御出の節差上度と存候 艸々
五月三十一日

九〇三

明治四十三年六月四日 牛込區早稻田町七番地より府下大森山王杉村廣太郎氏へ

○拜啓「新聞紙上の印象主義」慥かに落掌。其理由も正に拜承。至極賛成。僕は年來悪口ばかり云はれて
ゐるから、まだしもだが、君は甚だ迷惑だらう。よし兩人とも構はないとしても社のために悪いから、こ
んな方法をとるのは此際結構だらう。深く御手数を謝す。
○其上「新聞紙上の印象主義」は新らしくて面白い。ことに文藝欄に投書してくれる人は、商買氣がない
から、ゆつくり辛抱して讀めば相應の事を云つてるのだけれども、夫程手つ取り早く片付ける方法を講じ
て呉れないで困る。かう云ふ人に讀ませる丈でも甚だ利益がある。
○此間の英國皇帝の遙拜式の記事（築地會堂の）は讀んで面白かつた。且書き方がうまいと思つた。あれ
も一面から云へば印象的な描寫ぢやないか。僕はあの記事を読んだ時、新聞記事として大變新らしいとい
ふ感じを起した。あれは君のかいたものではないか。
○玉稿中×から×迄は少し論旨がそれる様だ。それを布衍しては又長くなるから割愛した。あしからず。
○「四篇」といふ書物を出版す。朝日に出た舊作をあつめたもの也。君もし入用なら何時でも進呈。

六月四日夜

金之助

楚 兄

九〇四

明治四十三年六月五日 午後十一時十二時 牛込區早稻田町七番地より麴町區元園町一丁目武者小路實篤氏へ〔はがき〕
拜啓尊稿正に落掌致し候。あれで宜しいと思ひます。たゞ全局に涉つての議論になると、あゝばかりも
行くまいと思ひます。今少し原稿がたまつてゐますから少し後れますから其積に願ひます。少し位時日が
経過しても腐る種でないから構はないでせう。毎々難有存じます。

九〇五

明治四十三年六月九日 午後三時一四時 牛込區早稻田町七番地より神田區駿河臺鈴木町十七番地大野方橋田丑吾氏へ
拜復「猫」手元になき爲め前後の關係不明なれど御答申上候
メジヨー・ベンデニス。（サツカレーの小説ベンデニス中に出て来る人物。世俗的知識に富めど高尚な
理想も何もなき所謂世間的の人、或は俗物）
ベオウルフ。アングロサクソン時代のエピック詩の主人公。ガルガ Galgala は現今の英語の gallows
絞首臺の事
ピヤース・プローマン。十四世紀頃の英國の詩の名。ブラックストーンは有名な英國の法律家 Com-
mentaries of the Laws of England の著者

先は右迄 艸々

六月九日

橋田丑吾様

夏目金之助

九〇六

明治四十三年六月十日 午後二時—二時 牛込區早稲田南町七番地より小石川區久堅町七十四番地菅虎雄氏へ

拜啓 自分の小説中に書き込む必要ありて「われに三等の弟子あり所謂猛烈にして諸縁を放下し專一に己事を究明するこれを上等といふ云々の戒を大燈國師の遺誠として書いたる所ある人よりあれは夢窓國師の遺誠だ大燈の遺誠ではないといふ注意を受けたり。さうらしくもある。どつちだが御教示を乞ふ。又何に出てるか其邊も序に御教へ被下相成るべくは出所の書物を一見致度候

又塔頭を塔中と書いたとて注意を受けたが是も僕の心得違で塔頭でなければならぬのだらうな。又室内といふ言葉はあるが室中とは聞かないと注意した男がある。夫もさうらしいが能く知らず序に御教示を待つ

胃病にて長與病院に行く胃くわいよりの疑あり。ことによると入院の積。

君の不眠如何。クスグッタイ感じ如何。老顔頭を壓して至御互に棺でも作つて置く事ぢや 艸々

六月十日

金之助

虎 雄 様

九〇七

明治四十三年六月十日 午後二時—二時 牛込區早稲田南町七番地より府下東鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ

拜啓赤門前御出版の由承知致候あれは如仰小生よく讀まざりしものなれど讀んだうちに大分不本意の所有之君もいま繰り返したらば定めて色々な缺點に氣がつくだらうと思ふ何卒其邊に御注意の上よく御訂正あり度切望致候

新文藝に出た崖下の家面白く候今日の萬朝の六號につまらないものゝ様にかいてあり候があれは嘘に候

僕は君の短篇の方が却つて赤門前より優れてゐるのがあると思つてゐる。

漸く小説を書き終つたらば色々な雑用が出来矢張忙殺。胃腸病院に行く胃くわいよりの疑あるとの事にて只今糞便検査中なり 金ばかり入つて困る。君の投稿未だに出さず甚だ御氣の毒原稿が重なるの方々へ

義理がわるくなる

右御返事迄 草々

金之助

六月十日

豊 一 郎 様

肝心の序文の事を忘れたり。君が書き直したのを一寸見た上にしたし如何にや夫でなければ又外に一工夫致すべく候

九〇八

明治四十三年六月十二日 (時間不明) 牛込區早稻田町七番地より兵庫縣多可郡黒田庄村藤井節太郎氏へ

拜啓五月五日附の御書面に對してとくに御返事可致答の處種々雜用にとり紛れ荏苒今日に至り候怠慢の罪御ゆるし可被下候

御編輯の引例一寸拜見致候斯様に頁多きものを根氣に御書き抜の段敬服の至に存候嘸かし御辛勞の事と存候

右に就き一寸御注意迄に申上候が斯様の引例は理論の例證として必要な場合多く従つて己れにしかとしたり議論なければ左のみ用をなさぬものにて候(小生の文學論中にある分類はよろしからず例も面白からねばあれは論ずるに足らず候)

夫でなければ單に文章の手引草として類別し讀者の讀みたいと思ふ所を索引の便宜にて隨時に讀ましむるに有之。此點にては可成面白き例を撰む必要相生じ(候)

右兩様のうち何れにてもよろしく候間御盡力希望致し候

只實際上の困難は夫程浩瀚の書物を書肆が引き受けて出版するの勇氣あるかの問題に候。現今の様な不景氣の時には先づ以て絶望の姿と存じ候此邊はよく御注意可然と存候

玉稿は別封小包にて御返却申上候先は御答迄 草々頓首

六月十一日夜

藤井節太郎様

夏目金之助

九〇九

明治四十三年六月十二日 午後十二時—十二時 牛込區早稻田町七番地より府下葛嶋町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ

啓 「門」の中に吾に吾に三等の弟子あり所謂猛烈にして諸縁を放下し云々の遺誠を大燈國師のものとして掲出す。ある人報じて曰くあれは夢窓國師の遺誠なり大燈國師のにあらずと、第二の人又報じて曰くあれは正覺國師の遺誠也と第三の知人は即ち曰くあれは關山國師の作る所と

小生無識にて適從する所を知らず。御社の森大狂先生は斯道の人也。願くは御序原の同君に出所を御確め被下たし。又其出てるる本の名及び出來得るなら本其物を拜見したき由御依頼被下度候

右用事迄 草々

六月十二日

金之助

豊一郎様

九一〇

明治四十三年六月十三日 午前零時—五時 牛込區早稻田町七番地より本郷區森川町一番地表北裏七十一號朝倉氏方林原當時岡田耕三へ

拜啓先刻外泊届の印をもらふための届書に肝心の印を捺さずに届書を其儘封入して送原くつたやうに思ふ故別紙白紙の好加減な所に印を押して上げる故本文はそちらにて御認めありたく候 艸々

六月十二日

夏目金之助

岡田耕三様

六七〇

九二一

明治四十三年六月十七日 牛込區早稻田南町七番地より府下大森山王杉村廣太郎氏へ

啓上厲人厲語記念特製參拾號御惠送を受け拜謝

あの表紙は女の兒の記念にはうつりの好い美しくいものである。夫にしては「厲人厲語」が少々強過ぎる

僕胃潰癰原の嫌疑にて明日から内幸町の長與病院に入る。交詢社の御馳走も當分駄目となる
右迄 艸々頓首

六月十七日

楚人冠兄

金之助

九二二

明治四十三年六月十八日 午前十一時—十二時 牛込區早稻田南町七番地より牛込區大久保余丁町百〇六番地安倍能成へ

拜啓御病氣の事は承はり候へどもついに御見舞にも參上致さず怠慢に打過候御回復の模様は小宮杯より折々耳に致しひそかに喜び居候粥が食べられる様になつた事も小宮から聞き候もう大丈夫とは存じ候へども精々御攝生專一に存候小生は其後不相變胃病に苦しみ居候處十日程前決意長與の胃腸病院へ參り候處胃潰癰原の疑にて遂に入院する事に相成明十八日より轉移致候いつ出るか分りかね候。もし君丈夫になつても

未だ入院中ならちと遊びに御出掛被下度候

「土」は御説の通うまく候。「四篇」御高覽の由難有候

先は右迄 草々

六月十七日夜

夏目金之助

安倍能勢様

九二三

明治四十三年六月十九日 午後七時—八時 麴町區内幸町胃腸病院より麴町區九段中坂望遠館松根豊次郎へ

拜啓此間は御手紙を難有う。夫から醫者の勸にてとう／＼表面の處へ入院、食物も、臥起も、萬事醫者の指圖通。運動もいけず、入浴もまだ許されず。徒然無聊。たま／＼閑に乗じ此手紙をかく。さうして御返事に代ふ。小鳥を飼つてゐる病人あり。ちちちちと鳴いてゐる。 艸々

六月十九日

金之助

豊次郎様

今日の新聞に獨乙國賓松根式部官の案内にて云々とあり

九二四

六七一

明治四十三年六月二十一日 午後八時—九時 麴町區内幸町胃腸病院より府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ
拜啓それからの御批評掲載おそく相成不相濟候（五月二十一日）とある論文が丸一ヶ月後の六月二十一日に掲載済になるのも何か最初から工夫したるやうの偶然に候。

改めて申候御批評は上中下共立派に拜見特に中を美事に存候。下は「それから」の筋を明瞭に記憶してゐる人でないと讀むに骨の折れる所有之候。然し長いものを短かくつゞめる爲には已を得ぬ譯かとも被存候兎に角中を讀んだ時は突然自分が偉大に膨脹した様に覺え後で大いに恐縮致候
御蔭を以て「それから」も立派な作物と相成候。作家は評家により始めて理解せらるべきものかと思ひ候位に候。多くの作者が一二行の悪口で葬らるゝ中に小生は君の如き批評を受くるは面目にも光榮にも有之改めて御禮申上候 艸々頓首

六月二十一日

阿部次郎様

夏目金之助

九一五

明治四十三年六月二十三日 午前九時—十時 麴町區内幸町胃腸病院より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ 「はがき」
本二十三日の柴漬にアブリルフルとあるが英語ではエブリルフルと云ふので、四月をアブリルなんて發音されては文藝欄擔任の漱石の英學者としての名前に關る。元來獨乙語なら獨乙語でいゝからアブリルナルとでも書いたら好いぢやないか。何を苦しんで半解の英語なんか振り舞すのだから要領を得ない。病院「に」も病人にも左右の兩隣にも變化なし。 艸々

六月二十三日

九一六

明治四十三年六月二十六日 午前八時—九時 麴町區内幸町胃腸病院より茨城縣結城郡岡田村長塚節氏へ
書狀にてわざわざの御見舞篤く御禮申上候年來の宿痾一層の進歩を加へ胃潰瘍とか申す病氣の由にて當分當院内に靜養まかり在候「土」御苦心の御模様嘸かすと御推察申上候是は自分にも經驗ある事とて大兄の御心狀よく相分り候御健康可成御かばひ可然か夏より秋にかけての御慰みの草花も御培養の御閑なき趣かうなると創作も人の子を賊するやの感を生じ候。「土」は毎朝拜見。一般に評判よき様に候。何卒今暫くの御辛抱願上候先は右御挨拶迄 草々頓首

六月二十五日

夏目金之助

長塚節様

九一七

明治四十三年六月二十八日 午後三時—四時 麴町區内幸町胃腸病院より北海道小樽區量徳町五十八番地林原（當時岡田）耕三へ 「はがき」
試験済にて御歸省の由結構に存候充分御攝生專一と存候。小生胃潰瘍といふ病氣にて十日前此所に入院靜養中。左したる事も無之候へば御心配に及ばず。先は御返事迄 艸々
六月二十八日

九一八

明治四十三年六月二十八日 午後五時—六時 麴町區内幸町胃腸病院より兵庫縣多可郡黒田庄村藤井節太郎氏へ

拜啓御手紙拜見致候御手漁の香魚御心にかけれわざく御送難有存候然る處殘念な事に陽氣の爲め腐敗致し居候由なるが或は箱の中でむれたのかと存候小生は只今病氣にて當院に靜養中に有之。どうしても香魚に縁なき身に候故腐つて「も」腐らないでも物質上の利害は同一に候たゞ御芳志に對し辱く御禮申上候 草々頓首

六月二十八日

夏目金之助

藤井節太郎様

九一九

明治四十三年七月三日 午後一時—二時 麴町區内幸町胃腸病院より府下西大久保百五十六番地戸川明三氏へ

拜啓御手紙難有拜見致候其後とうく思ひ切つて入院致し最初の一週位は轉地の如く香氣に消光致候處出血とまりて二週間目より菟藟コンニャクで腹をやくんだと云つて火の様な奴を乗せられるので一驚を喫し申候。のみならず一日にて腹が火ぶくれに相成り見るも淺間しく恐縮の體に候。昨今病氣よりも此方が苦痛に候。新潮は昨日宅より届き一見致候。夏目漱石論杯と大きな活字が目につくと、今迄世の中と無關係に暮したものが急に娑婆氣つき何だか又人間に立ち歸る様な情なき心持に候。

第一の印象はよくも漱石の爲めにブラフ君がかく迄に方々を馳け回り、諸家又漱石のためによくもこん

な面倒な事を敢てしてくれたかといふ勿體なき感じに候。然し新潮は新潮で又自分勝手の意味も有之べければ自然捕「ま」つた大兄等丈が御迷惑な譯に相成まことに申譯なく候。ことは大體の上に於て諸君が好意を以て同情を以て小生を批評せられてゐる様なのは難有き慰藉とも可申か。

ま、誤謬誤解等あるも是亦文壇一時の即興景氣づけ位の所と思へば夫迄に候。のみならず到底歴史逸話傳記類に徹頭徹尾本當のものは無之事を深く感じ居候昨今には、間違が却つて面白く候。

大兄は冒頭より漱石黨と名乗つて出でられ候御厚意御奮發に對して小生とくに他の諸君以上に御禮を申さねばならぬ義務有之候。然る處御批評のなかに漱石は付合ひにくひ男と有之。是も貴意を諒し候へども甚だ心細く候。小生から申せば大兄は小生に對しあまりに慇懃過ぎて付合にくく候。是を兩方で撤回してもつと無遠慮になつたらもつと御互が樂になるだらうと存候。小生は御評を拜見せぬ前より常にさう考へ居候處あれを見て愈思ひ當り候様な心持に候。私はいつでも無遠慮になれる男に候。大兄はみんなから淡泊な人と評されて居らるゝ紳士に候。御相談の上是から交際法を變化して見たらどうだらうかと存候。貴意如何。と申し「た」からと云つて別に御返事を豫期する譯にも無之。まづ病中のいたづらと御聞流し可被下候 艸々頓首

七月三日

金之助

秋骨先生

九二〇

明治四十三年七月十二日 午後二時—三時 麴町區内幸町胃腸病院より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ

一寸御願あり病氣中に謠本の揃つたのを綴ぢて置きたいと思ふ。
宅へ行つて調べて五冊づゝかり綴になつてゐる奴を相馬屋か何處かへ持つて行つて綴ぢさしてくれ給へ。
あとからも綴ぢるのに表紙がちがつては固るから、其邊の都合のつく位澤山ある表紙を撰んでくれ玉へ。
内外にて表紙を區別してもよし。

表紙に白紙を貼付する事も頼んでくれ玉へ（あとから名前を書き込む）

「松風」はどぢ込ますにあるが、あれを入れて五冊にまとまるならあれも入れて呉れ。あれは新の本だ
が何時迄立つても歸せと云はないから貰つてもよからう。しかも相手が新だから色々な點に於て、是を斷
行しても差支ない理由がある。

揃はない分を寫してくれる人があるなら頼んでだん／＼纏めたし。夫も一寸聞き合して呉れ。面倒でも
揃はない分の名前を表にしてそれを持つて行つて頼んでくれ。（是は事が面倒ならやらなくても好い）
以上

七月十一日

金之助

豊隆様

九二一

明治四十三年七月十四日 午前八時—九時 麴町區内幸町胃腸病院より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ〔はがき〕

啓昨日願候謠本寫取の件朱點入に願へれば大變面倒省け好都合に候。四方太君のおとつさんへ餘計御禮
をしてさう願へればさう致し度野上へ一寸御依頼願候 以上

十四日

九二二

明治四十三年七月二十一日 午前八時—九時 麴町區内幸町胃腸病院より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ〔はがき〕

拜啓御懇切なる御見舞狀頂戴難有候小生病症は胃潰瘍にて今少しすれば退院位は出來さうに候、平生も
御無沙汰病氣になると猶御無沙汰まことに不相濟候右御禮迄 艸々

七月二十日

九二三

明治四十三年七月二十一日 午前八時—九時 麴町區内幸町胃腸病院より千葉縣成田町鈴木三重吉へ〔はがき〕

拜啓此間は御見舞難有候御手紙も拜見致し候も少しで退院位出來さうに候。小鳥の巢島へ行く所から
大變よろしき様被存候、あの調子で始めから行かなかつたのが甚だ残念に候右迄 艸々

九二四

明治四十三年七月二十九日 午後八時—九時 麴町區内幸町胃腸病院より北海道小樽區量徳町五十八番地林原（當時岡田）耕三へ

手紙をもらつて返事を出さうと思つても人が不絶來るのと懶いので甚だ失禮した
胃潰瘍の療治は一段落ついて今は消化試験やら胃液の試験やらをやつてゐる。もう少し「し」したら退院
の許可が出るだらうと思ふ。時々散歩を許されたので日比谷やら銀座へ出かける。病院で時々原稿をかく。
人のくるのはいゝが床の上に横になりたくなる。北海道では山が破裂して大騒ぎ、此間友人がノボリベツ

の温泉へ行けと勧めたが是ぢや危険の様だ。

君の病氣は如何涼しい所だからいゝだらうと思ふ。手のシビレるのはどうも氣になつてならん、全體何の病氣だかそれが分らないのは變である。是非とも療治の必要がある様に思ふ。

今九月御上京の節に御目にかゝらう折角攝生を祈る 艸々

七月二十九日

金之助

九二五

明治四十三年八月二日 午後四時―五時 牛込區早稲田南町七番地より府下青山原宿二百〇九番地森次太郎氏へ

拜啓先日は御見舞難有候あの朝久し振で詩を考へ候それはあなたの扇子へ何か書いて見たくなつたからに候一時間ばかりして詩は出来候

來宿山中寺

更加老衲衣

寂然禪夢底

窓外白雲歸

といふのです、夫から墨を磨つてあの扇へ書きました處飛んだ字が出来上りました、扇は持つて歸りました

たがあれは私が頂戴して置きます 艸々

八月二日

夏目金之助

森次太郎様

九二六

明治四十三年八月二日 午後四時―五時 牛込區早稲田南町七番地より府下西大久保百五十六番地戸川明三氏へ

病中は御暑い所をわざ／＼御見舞難有候漸く輕快退院、田部君にはどうか大兄よりよろしく願上候。不取敢御禮と御報をかねて右申上候

九二七

明治四十三年八月二日 午後四時―五時 牛込區早稲田南町七番地より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

入院中は御見舞難有候漸く輕快に赴き退院致候右不取敢御禮旁御報迄 早々御令弟へよろしく

九二八

明治四十三年八月二日 午後四時―五時 牛込區早稲田南町七番地より牛込區辨天町百七十二番地山田繁氏へ

入院中は度々御見舞をうけ千萬難有候漸く輕快退院の運に至候、御禮のため參上致す筈の處攝生の都合にて時間甚だ窮屈故端書にて御免蒙り候 艸々

九二九

明治四十三年八月二日 午後四時―五時 牛込區早稻田南町七番地より牛込區市ヶ谷左内坂町橋口清氏へ〔はがき〕
入院中は御見舞難有候其節のグロキシニヤ珍重に眺めくらし候 漸く輕快退院致し候右御禮かたがた御
通知申上候 艸々

八月二日

九三〇

明治四十三年八月二日 午後四時―五時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地森卷吉へ〔はがき〕
入院中は度々御出被下難有候退院(やつと)致候いづれ九月に御目にかゝり可申候 艸々

八月二日

九三一

明治四十三年八月二日 午後四時―五時 牛込區早稻田南町七番地より府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ〔はがき〕
入院中は御見舞難有候漸く輕快退院致候
右御禮旁御通知申上候 艸々

九三二

明治四十三年八月二日 午後四時―五時 牛込區早稻田南町七番地より府下巣鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ〔はがき〕
漸く退院、病中の御見舞を謝候 艸々

八月二日

九三三

明治四十三年八月二日 午後四時―五時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ〔はがき〕
入院中は度々御見舞難有候漸く輕快退院の運に至り候右御禮旁御通知迄 艸々

八月二日

昭和三年九月一日印刷
昭和三年十月二十四日發行



著作權者

夏目純一

編輯及發行

漱石全集刊行會

東京市神田區南神保町十六番地

右代表者

岩波茂雄

東京市本所區番場町四番地

印刷者

井上源之丞

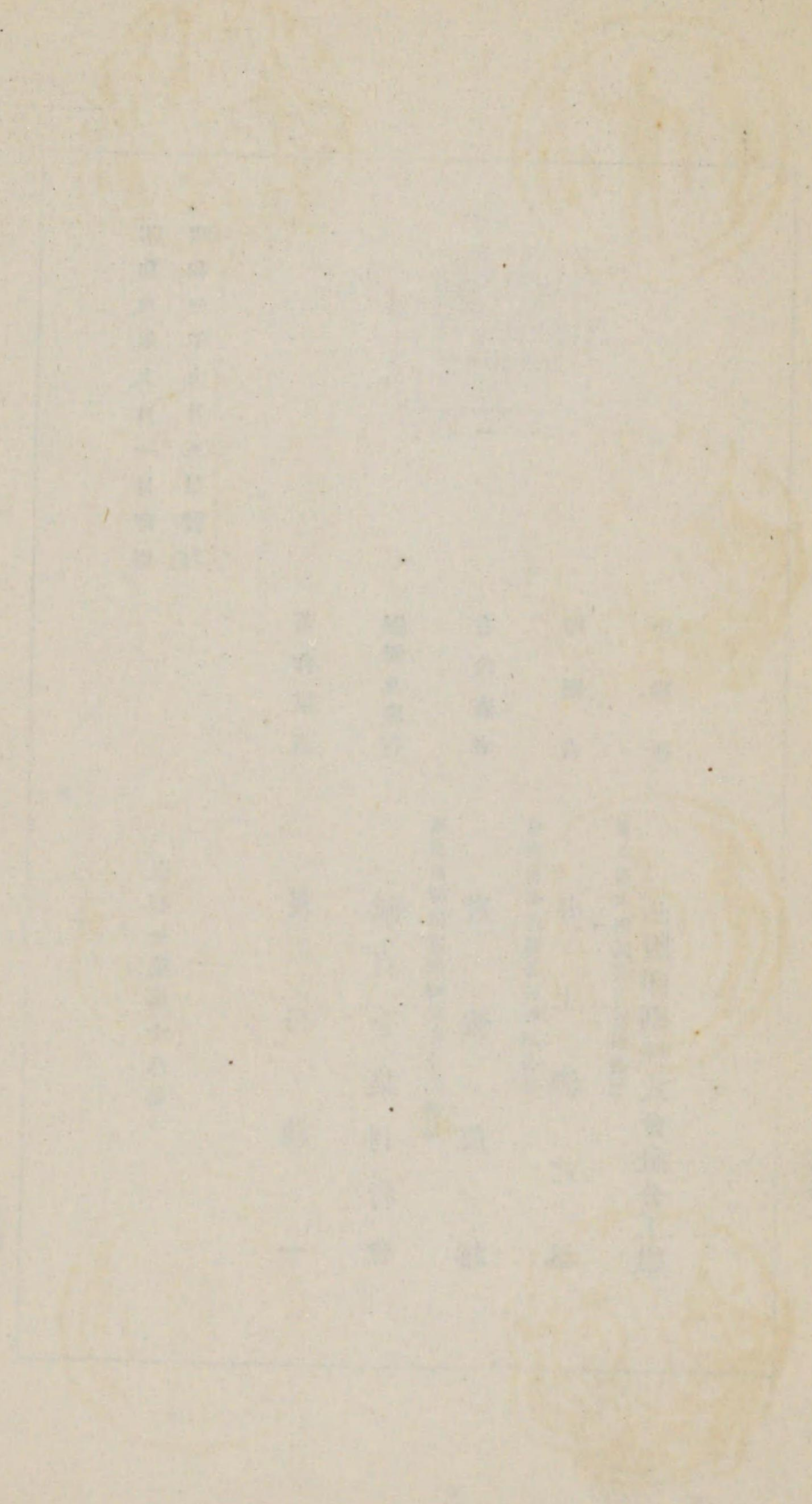
東京市本所區番場町四番地

印刷所

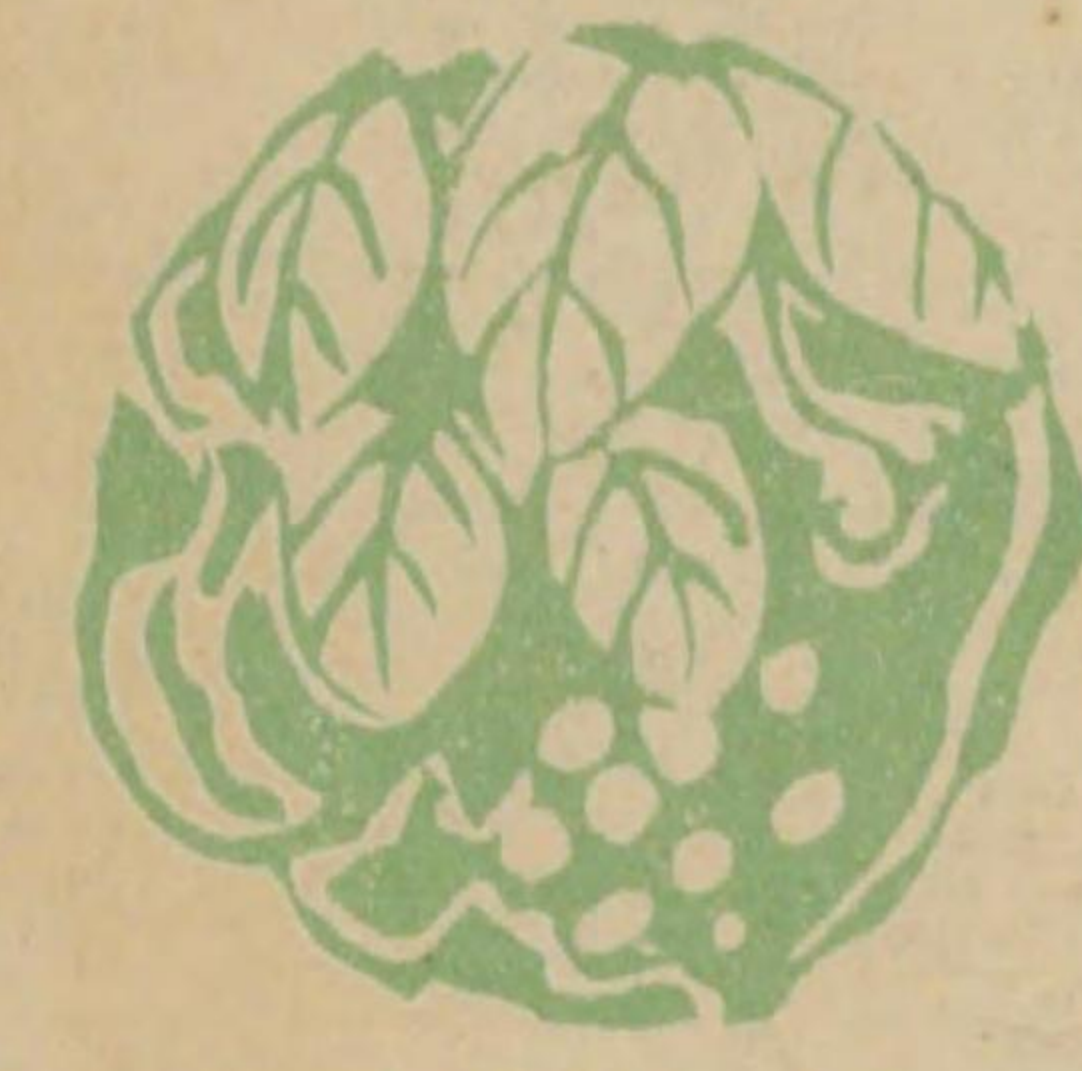
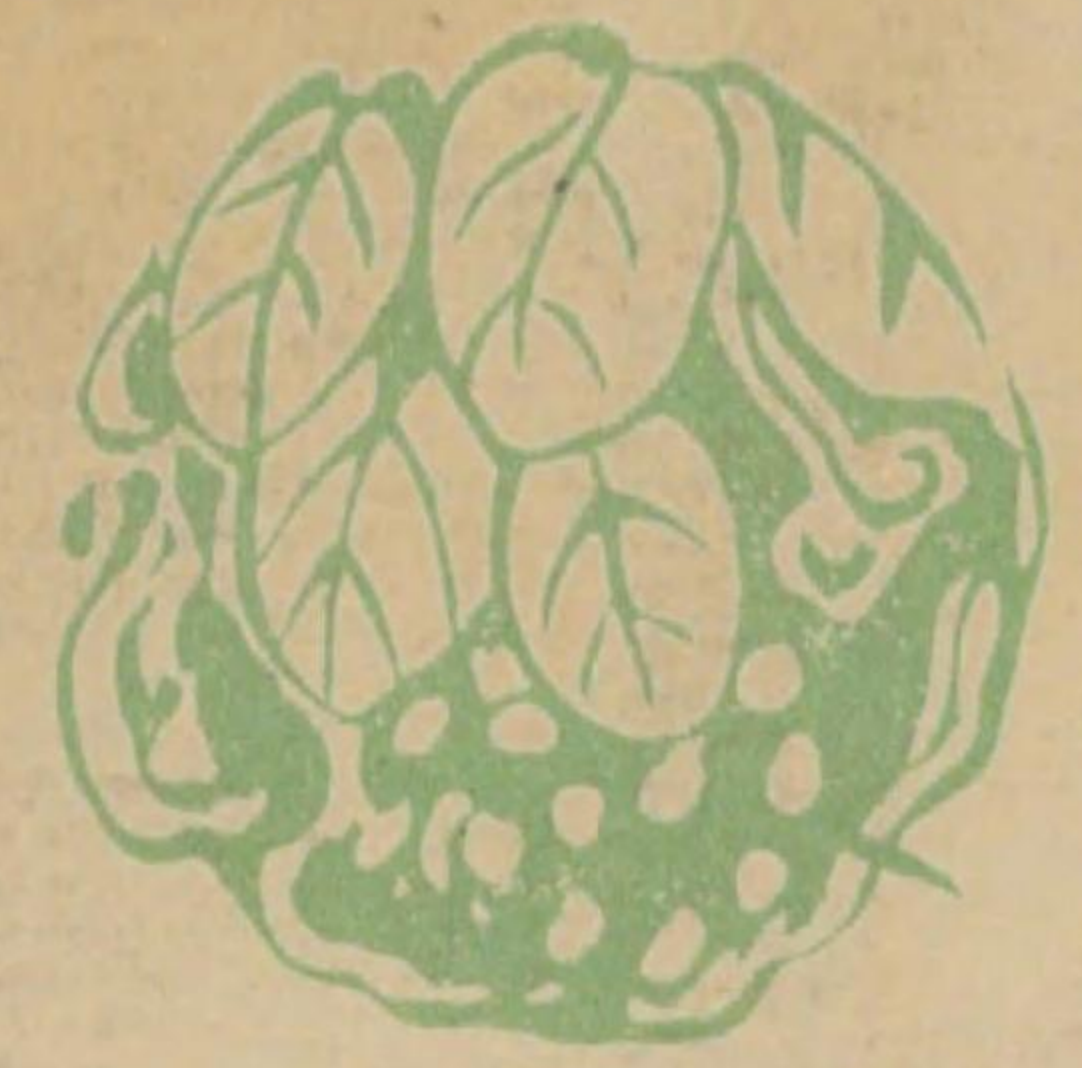
凸版印刷株式會社分工場

(大森製本)

1854



506
49



金馬野懸君
錦泉岩巖
正泉岩巖
正泉岩巖
正泉岩巖
正泉岩巖
正泉岩巖
正泉岩巖
正泉岩巖
正泉岩巖

